

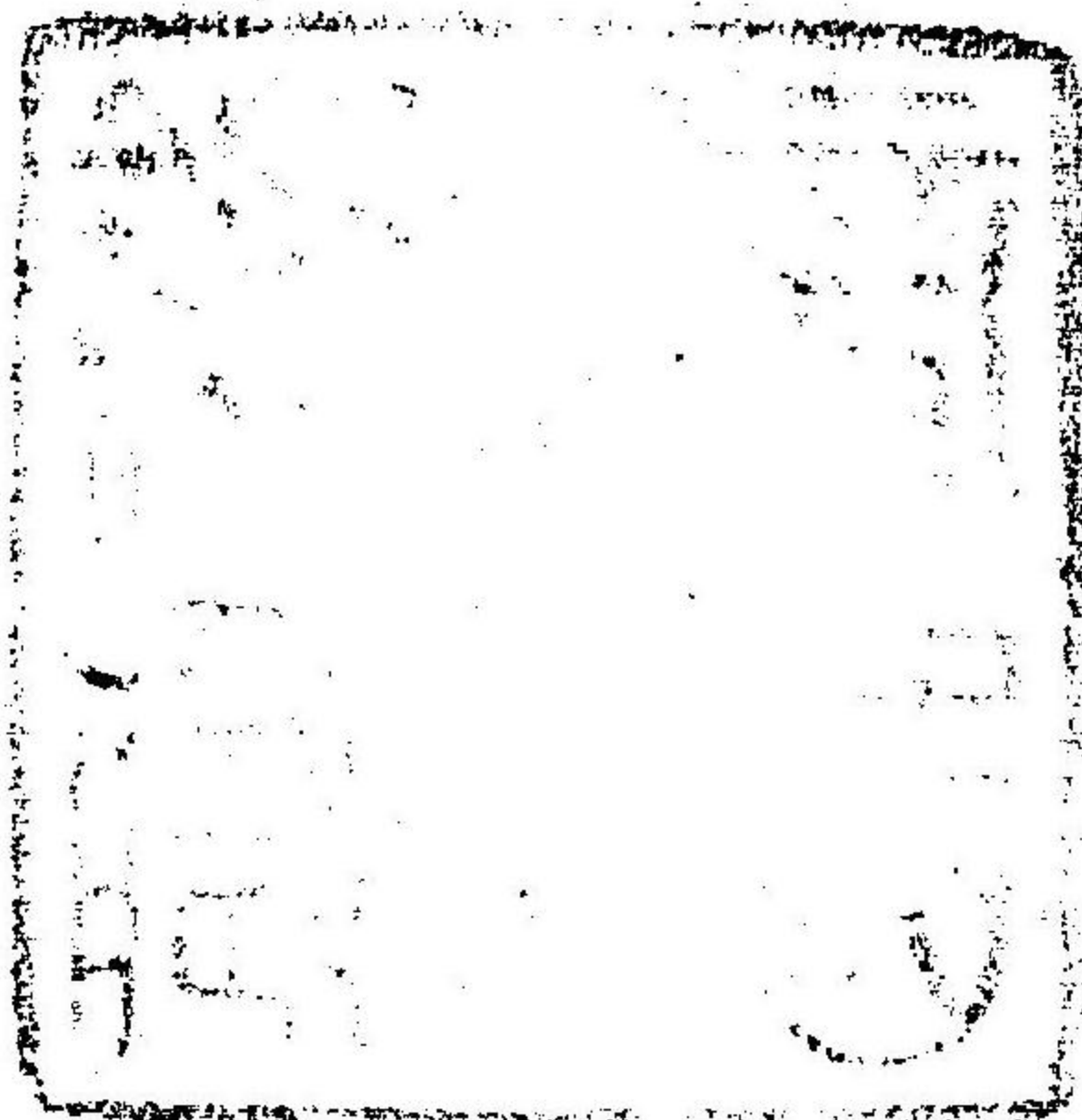
76
152

楚人冠著

厲人厲語

有樂社

96-452



取りて十とせになれる年の正月十八日、三とせごしの病に、自ら竟に其
の起つ能はざるを悟りてや、心徐かに枕邊なる祖母と父と

に暇を告げ、兩三週題目打誦したる後、左ながら睡る

如く逝けりしわが長女麗子が靈に

書をさしぐ



明治
43. 5. 4
内奏

卷頭語

- 一、語に曰く、『容厲かたがたくき人ひと夜半其の子を生うめり、遽あわて、火を取つて之を視みる。汲々きき然ぜんとして、而して、唯其の己おのれに似んことを恐おそる』と。『厲人厲語』の名是これより來る。
- 二、今年正月十八日著者一女を喪ふ。乃ち折きりふし編輯中なりし此の書を以て、彼が爲の記念出版となす。此の事世と交渉する所ところなし。唯親のみは斯く名づくることに由つて、一種の満足を得るを樂たのむ。
- 三、『放鼠記』一篇は友人中村蕪村が高等學校在學中の舊作なり。他人の文を卷頭に掲ぐるが如きは、如何にも體を得

ざるに似たりと雖も、體を得ると得ざると畢竟何の撰ぶ所と思ひて掲げつ。一には著者が此の文を『新佛教』紙上に見てより、愛誦措く能はざるに由り、二には著者の亡女兒と最も相善かりし、翁村の文を掲げんこと、記念出版にふさはしかるべきを思ひたるに由る。

四、此の書收むる所は、殆ど盡く昨年一月以降に公にしたるものより取る。唯此の例に洩れたるは、右の『放鼠記』と『同志に與へて新佛教を論ずる書』一篇とのみ。著者が故さらに此の劣悪なる舊作の一論文を加へたるは、著者故あつてふつに筆を此の種の文に絶ちたるに由り、それが最後の記念に供せんとなり、畢竟雞肋のみ。

五、著者は此の書中の諸篇を掲げたる各新聞雑誌が快く其の轉載を諾せられたる好意を鳴謝す。『中央公論』が其の近く本年一月の紙上に出でたる『變な女』の轉載を快諾せられたるは著者の特に深謝せんとする所なり。著者は、著者と特別の縁故ある『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』『和歌山新報』『牟婁新報』『中央公論』『新公論』『新佛教』及有樂社發行の諸雑誌の紙上に於て、此の書を紹介し又は批評せんことを忌避す。

明治四十三年三月十二日

大森忘機樓に於て

楚人冠識

國民新聞に答ふ (執筆の時間時季用具場所に就ての質問)

我等のちくらの者の種類に属する者共は、何でもかんでも即刻原稿入用といふ時の至る迄、なか／＼筆を執る氣にはなり申さず、此故に何處かへ特派せられて、郵便の切時間迄に大急ぎに通信を書くとか、又は編輯局にて、印刷工場よりの催促手厳しくして、随つて書けば随つて渡すといふやうな時が、最も氣乗りのして筆の執り易きものに候ふなり。推敲彫琢一字一句も忽語にせぬやうなものは、書けませず、又書きも致さず、新聞紙にそんな結構なものは無用と心得たり。執筆は夜よりも日中がよく、冬よりも夏がよく、雨天よりも晴天がよく、餘り静かな所よりも少しざわつきたるが宜し。執筆の場所に對する希望をいへば、別に立つて行がすとも手の届くやうな手近に参考書の列びたる所を第一の望みとす。無性者には無性者相應の希望あるものと笑はるゝともそれは御勝手なり。

厲人厲語目次

放鼠記……………一

同志に與へて新佛教を論ずる書……………八

時子……………三三

西八條の舊居……………七五

斜に觀たる紀州……………九〇—一八

一、高野山の糞……………九〇

二、山田の春秋閣……………九六

三、南海鐵道の急行……………一〇一

四、曉天の耐久中學 上(三七) 下(三三)……………一〇七

二

五、 安珍清姫が址……………一九

六、 南部の鹿島 上(三六) 下(三二)……………二六

七、 九里峽を下る……………三七

八、 熊野川の筏……………四

九、 勝浦海中の井戸……………五〇

十、 串本の稻村亭……………五一

十一、 潮岬の上野……………六一

十二、 潮岬と世界……………六七

十三、 湯崎の村賓……………七一

十四、 三年前の反吐 上(二六) 下(二二)……………二七

大森放語……………一八

非詩人詩語……………一九七

雲水行住……………二〇五

一、……………二〇五

二、……………二〇九

三、……………二一五

四、……………二二〇

五、……………二二五

六、……………二三〇

七、……………二三四

八、……………二三九

九、……………二四六

十、……………二五六

十一、……………二五八

十二、……………二六三

不流行兒放語……………二六九

非忠君非愛國主義……………二七七

年頭毒語……………二八六

變な女……………二九六

厲人厲語

楚人冠著

放鼠記

鼠あり、夜なく、出で、室を荒れまはり、本箱に尿し、卓子に尿し、時には、大事の書物を噛む。蓋し吾等「コンパニー」の催しある毎に、餡、麩、麩の屑、焼薯の皮などを散亂せしめ、知らずくの間に、書物の表紙などへも、御馳走の名残を止むるが故なり。ある夜、吾が同室の一人、赤インキの壺に栓することを忘れて寝

ねたりしが、翌朝講堂に教師が講義を筆記せんと、ペン挿し入
れて紙に引けば、こは如何に、色は薄黒く變じて、厭ふべき臭氣
さへあり、壺とり上げて、すかし見れば、一個の鼠矢、底の一隅に
止りて、種油様の液、壺の下層に漂へりき、思ふに、鼠公、インキ壺
を便器と誤りて、矢と共に尿をも發したるものと察せられた
り。此の事早く一室の談柄となり、中には、壺を昨夜ありし場所
に据ゑて、物好にも、鼠公が當時の姿勢を研究するものすらあ
り、或は、前足にて此の辭書に取付きつゝ、尿せしならんといひ、
或は、此の硯とインキ壺に體を横わたしにせしならんといひ、
さりとは餘りに遠すぎずやなど、評議まら／＼にして決せ
ず。はては、輕業師の鼠が此の至難の藝當を演じて、數多の鼠を、

夜中に慰さめしならんと洒落るものもありて、滿座の大笑ひ
となり、遂に其の日の漫録にまで上りぬ。

話の序ありて、吾此の事を小使に告げぬ。小使愕然として、痘
痕面を振立て、曰く、憎き鼠奴の業なるかな、ベストといふ危
険なる病氣さへ流行せる今の世の中に、いかで／＼容赦すべ
きことかは、早速今夜生捕にして、くれんと息まきて急ぎ物置
より、海老の天ぶらを餌に挿せる捕鼠器を取出して、吾に與へ
ぬ。吾之を机の上に置きて寝ねぬ。固より捕れたる鼠を交番に
持行きて、運善くば抽籤の一等にも與らんなどの野心ありし
にはあらず、只徒然の戯れにのみ。

翌朝起きて見れば、果して一疋の小鼠餌にかゝり、顛轉狼狽

して、頻りに逃口を捜し居たり。ナイフにてつくものあり、鉛筆もて叩く者あり、小使は屢々來りて、早く交番に持ち行かんことを求む。我つらく、其の鼠の相好を見るに、怜しげなる眼は圓く小さくして、黒水晶の珠を張りたる如く、敏き小耳は眞直に立ちて、可愛らしき頭を飾れり。口に美髯あり、毛に光澤あり、すらりと延びたる長き尾を股に挿み、洵々として籠の一隅に踞まれるさま、検事局に引き出されたる今の教育家も斯くやと思ひやらぬ。此の憐れのもの、未だ俄に殺すべからず、二日、三日、慰みに飼つて置くも、亦折からの興ならずや。吾此の旨を告げて小使を去らしめぬ。彼れ吾を好奇家と嘲りて出でぬ。

吾は此の日より鼠の親方となれり。塵とりの籠を彼が居間にと定めて、籠をば其の中に据ゑたり。寒からんを思ひて、古びたる手拭を入れてやりぬ。饑ゑつらんを慮りて、食堂に入る毎に、一匙の飯を掌に持ち歸りぬ。賄は常に目をそばだて、居たりき。

二日目の朝籠を取出して見れば、彼は昨日の古手拭もて、巧みに巢をば作りなしつ。朝寒を其の中に籠り居て、鼻の先ばかり其の外に出せり。飯を與ふれば一つ、巢に持運びて食ふ。前足を上げて物食ふ鼠の可愛らしき姿は、畫などにも數多く畫かれたれば、世の人誰も知れるなるべし。

三日目の午後、小使又入り來りて、鼠は如何にせしと問ひぬ。昨日も二度來れり。餘りにうるさければ逃げたりと欺きぬ。彼

れ憤り顔に出で行けり。

其の夕方なりき。友は皆散歩にと出で、吾獨り室に止まり、椅子に凭りて讀書に耽り居しが、室の隅にこつくと鳴る音頻りに聞えぬ。初めは何の氣も付かで聞き流しむたりしが、遂にその音が塵とりの鐘の中より起るものなることを確かめたりしかば、竊かに歩みよりて、そと窺ふに、果して鼠の前足もて籠の縁をば叩けるなりき。物欲しきにもやと、有り合せたる麵麩の屑を與ふれば、彼今は人に馴れて、巢の中へは隠れず、吾が見る目の前にていと旨げにそを食ひ盡しぬ。其の翌日はいかに喧しく籠のまはりにて、罵り騒ぐとも、彼れ遂におびえざるに至れり。かくて吾は鼠守の翁てふ難有き綽名をば得つ。

六日目の夜なりき。吾籠を机の上ののせて、彼が右に左に走るさまなど眺めつゝ、獨り慰み居しが、與ふるもの既に盡きたりしかば、如何にするならんかと、試に吾が左の食指を籠の中にと衝き入れぬ。彼は少しも騒ぐ色なく、暫し恠しげに指をば眺めむたりしが、やゝありておちくと進み出でつ。指に鼻推しつけて香を嗅ぐものゝ如くなりしが、何思ひけん、遂には吾が指に前足を二つままでかけて、そを踏臺に身を起し、籠の目より頭つき出して、頻りに外面を眺めやりぬ。

あゝ此の愛らしのもの、我れ殺すに忍びんや。七日目の朝終に之を放ちぬ。(三十五年十月、新佛教)

同志に與へて新佛教を論ずる書

同志諸兄。

一、
僕が此の書を諸兄に致す所以のものは一、曰く僕は暫く同志會の幹部と相絶たんとす。

夫れ争を好むは人の至情也。小犬の喧嘩をだに、人は急用をさし措きて傍觀せんとす。夫婦喧嘩の鬧なるものに會して、門前人の黒山を築くが如き、必ずしも之を都の人の物見高きにのみ歸すべけんや。僕は生得喧嘩を好めり、横町に酒屋の小僧相闘ふと聞けば、哺を吐いて、飛んで行き、向ふ河岸に博徒相搏

つと知れば、乃ち髮を握つて驅け行かんとす。私に思ふ、僕は能く喧嘩の福音を解す。漫りに平和を口にして苟安是れ事とす。るものゝ如き語るに足るべけんやと。此の故に僕は至る所に奮闘せり。赴く所として抗争せざるなし。唯夫れ争に高卑あり、闘に上下あり。僕は常に其の高きものを取つて卑しきを棄て、其の上なるものに就きて、其の下れるを去らんことを期せり、此の方針を以て直前勇往せんに、たとひ時に平和を攪擾するあらんとも、僕は衷心更に疚しき所あるを見ず。僕曩に世の平和を過重する者を罵つて曰へることあり。曰く僕豈に平和を愛せずといはんや。然れども僕が愛する所の平和は、悠久の平和也、永遠の平和也。此の如き平和に到達せんが爲には、時に却

つて求めて平和を破らざるべからざることあり。大なる平和の國、北米合衆國は、外英國と戦つて國を建て、内南北の争を経、其の礎を堅うしき。大なる争鬪の國、露西亞帝國は、是れ海牙に於ける萬國平和會議の主唱者たりしなり。漫りに平和を唱ふる者は、却つて是れ平和の賊、苟安偷平は、焉ぞ百年の大計を畫するものならんやと。夫れ争ふべきに争ふは義也、争ふべきに争はざるは愚なり。僕今其の當に諸兄と相争ふべきものに會して、其の聊か同志會の平和を攪擾するあらんを意とせずして、此に暫く我會の幹部を去らんことを決せるもの、亦此の意に出づ。諸兄能く僕の意を領すべけんか。

思ふに、士に尙ぶ所は出所進退の明なるに在り。戀々として

其の去就に迷ひ、一日の安を貪つて以て得たりとするが如きは、僕の生平最も嫌ふ所なり。今僕と諸兄と或點に於て相容れざるを知つて、猶且留つて諸兄の驥尾に附して動かんは、僕の如何しても堪へ得ざる所、乃ち強て忍ぶべからざるを忍んで、以て諸兄の側を辭せんとす。回顧すれば、同志會の組織成つて以來、此に五年、其の間具さに創業の苦楚を嘗め、今や事緒に就き、業礎を定め、前途の望漸く洋々海の如くならんとするに至れる時、突如として、其の要地を脱せんとするもの、誠に一擲の涙なき能はず。况や僕の同志會に於ける、僕の一身に於ける關係の重大なるものあるに於てをや。此の故に僕は深思し、熟慮し、幾度か心中の苦鬪を経て、而して初めて僕の良心の指し示

す所に従ふべきを決したるなり。事の發端は遠く一年前に在り。最近三個月の間に於て、最も甚しき煩悶を經、新佛教綱要の公にせられんとするの報に接して、遂に僕の決心は牢乎として抜くべからずなり了りぬ。

諸兄は必ず僕に向つて問はん、僕は何故に去らんとする乎かと。此の疑問に對する僕の答は極めて簡、曰く同志會の幹部に於ける信仰統一の傾向に嫌らざるが爲のみと。僕は必ずしも信仰統一の傾向を非議せず、之を以て自由討究の主義に相反するものといはず、之を以て同志會の綱領を蹂躪したるものとも信せず。たとひ之を以て主義綱領と相容れずとするも、それは同志會の發達に伴ふ自然の變化として、僕は強て怪むこと

をなさざるべし。唯夫れ此の傾向は僕の一身の側より見て、僕を安ずべからざるの地に置き、一には僕をして研究修養の地位より去りて、立教者の地位に立たしむること、二には、僕が研究の中途に於ける即今の信念と件の統一教義と互に相容れざるものあること、随つて三には同志會をして、幹部の歩調を一致して秩序ある運動に従はしめんには、僕の如き異分子の去るを以て、寧ろ我會の爲に利ありとすること是なり。

北米合衆國の進歩發達は、遂に之をして帝國主義を取らしむるに至りぬ。此の際之と反對の意見を有するもの、政府の要路に存せんは、米國をして有機的に活動飛躍せしむる所以に非ず。僕の去らんとするもの亦一に同志會の活動飛躍に、足

手纏ひなからしめんことを思へばなり。僕の如きは、羅馬の領土が歐羅巴全洲に跨るに至れるを察せず、尙ほ舊時のタイバ―河畔の一小都たりし時代を夢みて、漫に帝政の建設に反対するの愚者なるべからんか。

二、

諸兄。

僕は新佛教なるものが、六個の綱領の上に立つものなることを確信せり。曰く佛教の健全なる信仰、曰く信仰道義の振作普及、曰く宗教の自由討究、曰く迷信の勦絶、曰く制度儀式の撰擇、曰く政治上の保護干涉の排斥。苟も此の六個の綱領を是認せる者は、盡く是れわが同志にして、此の外の諸點に於て、各人

如何の信仰道義を把持すとも、そは各人の自由行動に委し同志會と何等相關する所あるものに非ず。思ふに、籍を我が同志會に掲げたるものは、盡く皆、是の如く確信して入り、是の如く確信して留まれるなるべし。此の點より考察し來れば、我徒の殆ど凡てが一致したる所の汎神觀も、現象即實在論も、又我徒の多數が同意したる現世主義、常識主義乃至非未來論も、實は是れ現在同志の私見の、偶ま一致したる意見たるに止まり、斷じて同志會全體の意見として解せらるゝことあるべからず。たとひ百人中の九十九人が一致すとも、其他の一人が異議を唱ふる時は、其の一人の異議だに、我徒は之を尊重せざるべからず。又たとひ百人が百人ながら一致せんとも、我徒は其の

將來に入り來るべき第百零壹人目が、之れに異議を唱へん時、之をさへ包容し得べき餘地を存しおかざるべからず。之を以て、我徒の活動が餘りに散漫に流れんことを憂ふるものはあるべからんも、こは是れ、我徒が當初に於て定めたる綱領が、當然散漫に陥いらしむべかりしに由るものにして、我徒は飽くまでも之に對する責任を負はざるべからず。既に是の如き綱領を標榜して、天下の同志を招ける以上は、其の我徒の幹部に立てる少數者の私に有せる意見と相異なるが爲にとて、之を拒むことあるべからず。否、我徒の多數と相容れずとて拒むことを得ず、否、我徒の殆ど盡くが之と相容れずとて拒むことを得ず、否、現代の我徒が盡く之と相容れずとて又之を拒むこと

を得ざるなり。我徒の立場は綱領によりて制限せらるゝ外、すべての點に於て寛濶なるべく、包容的ならざるべからず。一言にして之れを覆へば、新佛教は六個の綱領也。其の他に至つては、すべて各人の勝手に思ふ所、自由に考ふる所に放任せずんばあるべからず。新佛教はキレグマ主義にしてドグマ主義に非ず、會衆主義にして教會主義に非ず。少くとも僕は是の如く新佛教を觀じたり。

然るに我徒近來の行動を顧みるに、諸兄の行ふ所は、動もすれば、綱領以外に混沌たる何物かを凝固せしめ、之によりて、次第に我徒の信仰箇條を確立せんと企つる者の如し。信仰の確立は、僕と雖も之を望まざるに非ずと雖も、そは我徒が數代數

世の洗鍊彫琢を経て、自ら渾然として確立せられ來らんことを欲する迄にして、彼の基督教徒がニケア會議に於て、其の信仰箇條を定めたるが如く、人爲的に一擧に定め終らんことを望むものに非ず。斯ばかりのことは、諸兄の知らざるなかるべしと雖も、諸兄が熱心の餘、知らず識らず事の此に出づるには非ざるか。諸兄が説く所の常識主義は明に世人をして我徒は理想主義に反對するもの、如く思はしめたり。諸兄の説く所の現世主義は、多くの未來生を信する者をして、新佛教に近づく能はざらしめたり。諸君が説く所の現象即實在論は、新佛教の綱領に異議なくして、而して一面に人格的佛陀を信する一派の佛教徒を新佛教より斥けたり。斯の如きは包容的なるべ

き新佛教徒同志會の志に非ざるのみならず、又た諸兄の志にも非ざらん。然れども、こは是れ、諸兄が熱心の筆に成れる文字を見て、其の私見に過ぎざるを察せず、我徒中の重要なる地位に立てる諸兄が、偶然に一致したる意見を、直に新佛教の信仰箇條と速断したる者の誤見にして、諸兄の興り知らざる所なりともいふことを得ん。若し又た此等世人の誤解を釋かむる爲にとて、姑く諸兄の筆を綱領以外に走らざらしむるか、若くは断然、新佛教の紙上より退かしむるが如きあらば、我が新佛教は千調一律の乾燥文字を以て充たさるべきか、或は全く見るに足らざる三文雜誌となつて了るべき愛あり。斯かる結果に陥るべきを恐れたるが爲に、僕は今日まで、此の點に關し

て何等の献言をなすことなくして已みにしなり。然れども、諸兄よ、僕をして遂に沈黙を破らざる能はざらしむべき一事情は出来せり。『新佛教綱要』出版の計畫是也。

たとひ、『新佛教綱要』は我徒中の二三子の手に成れるものとするも、其の二三子は諸兄の如き重要な地位に在る人のみにして、加ふるに、苟も題して『新佛教綱要』といふ以上は、之に掲げられたる所のものこそ、誠に新佛教徒一般の信仰を告白したるものなれと解せられんこと、是れ普通の順序なり。然るに其の所謂綱要の目録を閲するに、單に綱領若くは歴史の解説に止めずして、或は一神汎神を論じ、或は超物質主義を論じ、或は現世主義を論じ、或は生死問題を論せるあり。皆是れ諸兄三

五の意見として、當然新佛教の綱領とすべからざるものゝみ、諸兄にして斯の如き書の出版を敢てし、綱領以外別に我徒に要するものあるべきを是認する以上は、僕と雖も、多くの世人と共に、諸兄が其の三五の一致したる意見を基礎として、早くも一新佛教宗の信條を確立せんとする者なることを疑はずんばあらず。僕が此等の綱領外の諸説に對して、賛否いづれにあるかを問ふこと勿れ。たとひ僕が諸兄と一致すとも、又今の新佛教徒擧げて諸兄と一致せんと、僕は自由にして包容的なるべき新佛教が、次なる時代の異議を眼中におきて、俄に信條を定むることの甚だ輕擧に近きを難せんと欲する也。

僕の如きが、新佛教徒中の重もなる一役者として働き得る

は畢竟新佛教の態度の研究的にして、一所に膠着せず、容認的にして一派に偏せざるに由るのみ。今若し俄に此の方針を脱して一定の信條を標榜して立ち、研究の地位より進んで傳道の道に向はんとするに至らば、僕等淺學不才固に其の任に非ざるもの、豈に諸兄と共に此の重荷を負ふことを得んや。是れ僕が去らんとする所以の一也。

三

僕は僕自ら何等告白する所なくして、徒らに諸兄の勇ましく其の所信を吐露して世に問ふを、汗むが如きを難せられられたること屢也。然れども諸兄よ、僕は此の點に於て根本的に諸兄と考を異にせり。

實にも、僕は未だ曾て一たびも信仰を告白したることあらず。然れども僕は有體に言はんとす。僕には信仰なるものなき也。

諺に「二階から眼藥」といふことあり。今の所謂信仰なるものは、慥に夫也。凡そ宗教の極致は、横綱大關ががっしと四つに組み、離れず動かざるが如きものならざるべからず。三段目力士の小手先きの争にも似たる、信不信の論の如きは、抑も末の末のみ。宗教のことは、信ずる信せぬといふが如き、高利貸が貸金の相談をなす底のことに非ざる由は、僕嘗て之を語れり。夫れ信とは、信ずる主體と、信せらるゝ客體とあつて、之が何等かの拍子にぶつかり合ふを謂ふもの、まどろきことも亦甚しか

らずや。若し夫れ信じて仰ぐといふに至つては、其のまどろきこと更らに一層を加ふ。仰ぐとは首を上げて視るの謂。仰ぐ者下に在り、仰がるゝ者上に在り、其の間相距ること十歩二十歩にして、初めて成り立つべき一種の形勢なり。斯の如きは我以上に神を認めて、之が攝理に一切を委せんとする基督教徒にこそふさはしからめ。又た我以上に彌陀の光明を仰ぎて、之が加護とやらんを強要せんとする愚昧なる門徒宗の者にこそさるべくはあれ。唯心に淨土を容れ、己心に彌陀を現じ、身外に神なく、心を離れて佛を視ざる僕等の見地より視て、何の醉興にか、頭の骨の痛くなるまで仰ぎまはるべき神佛あることを知らんや。

信仰などといふものは宗教に於て無用の長物也。信仰なるものを、道に入るの一方便と見んは、取るべきなきに非ずと雖も、道に入り了せる境涯を、信仰と名づけんは當らず。信仰といふ語の中に、既に凡夫と佛陀との別を存し、我と彼との間隔を認めたればなり。誠に道に入れらんに、凡聖合致し、彼我相容せるものならずんばあらず。之れを假に稱して、絶對に融和し、宇宙と冥合すといふを聞いて、直に早合點して、鹽かけられたらん蛭の如く、とろとろになつてしまふこと、解すること勿れ。有情非情を滅して、超然として一種奇怪なる幽冥界に入るものとなすこと勿れ。色香味觸法を去り、眼耳鼻舌心意を棄てて野呂間の催眠術にかゝりたらん如く、夢然晏然として、世と

相關せざるものとなすこと勿れ。相關せざるところか、關して關して、而して關し抜ける所に、此に一條の大道坦々として存する也。之れを信仰といふ、固より得ず。融和といふも當らず。冥合といふも、亦未在此に於て、僕は假りに一新語を拈出して、之を「同住」といふ。同住、是れ實に宗教の極致也。

諸兄は、此に於て、僕が這の什麼に同住する乎と問はんとすらん。問はるゝ迄もなし、僕は一言にして答ふべし、曰く言ひ難し。

僕が斯くいふを見て、語に窮してごまかすものとなす者あらば、僕且つ秋水を引いて、彼が頭を斬り去らずんば已まじ。實にも、僕は語に窮せり。されども僕は、之を以てごまかさんと欲

するものに非ず。夫れ至極の大道を言語文字によりて、完全に表明し得べしとするが如きは、餘りに言語文字の價を買ひられるもの、僕は不幸にして、言語文字によりて言ひ表はし得るが如き、仕入の信仰を持ち合せ居らざる也。絶對といはんは、相對を脱したるが如く、無限といはんは、有限を容れざるに似たり。神といふ、當らず。佛といふも亦當らず。若し夫れ、強て其の何と言ふとも、竟に當らざるべき點より、言を立つれば、均しく假りに言はんに、何といふとも亦可ならずや。終極の境界の誠に、言語を超絶したるものならんに、姑らく假托の語を用ふるに、何の撰ぶ所かあるべき。神といふも得たり。佛といふも得たり。天輪王命といふも亦得たり。天といひ、地といひ、人といひ、獸と

いひ、酒といひ、餅といひ、庭前の柏樹子といひ、隻手の聲音といふも、何かは妨げん、之を説くに五千四十八巻を費すも、四福音書を用ひんも、コーランを用ひんも、鹿山一餉話を用ひんも、乃至「新佛教綱要」を用ひんも、「救世」を説かんも、「光明」を説かんも、説くことに於ては、如何やうにも説き去り説き來り得ん、説き得て玄妙を極むと雖も、自ら道に入らずんば何かはすべき、既に道に入るの時、曩の横説堅説の如きは、皆一片の古紙たるに過ぎざらんか。

此の意味に於て、僕は世の佛耶二教が、其の説く所を異にするも、其の極致に於て一なりと唱ふる者を笑はんとす。極致に於て一なること、何の教にか然らざらん、何の説にか左あらざらんか。

るべき。神秘説は物質論と和すべく、田中治六君の説く所と、鈴木大拙君の語る所と、釋然として相容るべし。人を導くの道に於て難易あり、人を教ふるの法に於て巧拙あり、一定の實所に達するに、或者は却つて横道に蹈み違へしめ、或者は道の後に退かしめ、或者は進むの速にして、或者は遅しといふ如き差はあるべきも、究竟の境涯には、如何なる教旨も、末遂に導き得ざるはあらず。僕の言辭を以て、餘りに人を踏みつけたる不敵の舉動となすこと勿れ。僕は誠に斯く住して、斯くいふ也。

此の故に僕は諸兄の所説に對して、同時に賛同し、同時に反對し得べきことあり。例せば現世主義の如き即ち然り。僕の如き、現即今主義、又は現瞬間主義を取る者は、現世主義といふを

だに尙ほ悠長に失したるを認む。然れども、之と同時に、未來を排して、死が一切を斷無に陥らしむとまでは思はず。僕等は即今に住して、自己脚底の一步にのみ眼を注ぐべしとなす。念頭些の過去なく、未來あることなし。さりながら之と同時に、未來に關して、別に説あり。僕は死を以て自然の順序に従ふ人生の一步とす。之を以て、或る暴力によりて、突然自然の順序を中斷せられたるものとは思はず。随つて人間が僅に絶息したりといふが如き一小出來事によりて、現に今まで存在せるものが、俄に亡滅し去るとは信せず。凡そ有が無となるといふは、變化の最も大なるものにして、世に若し斯ることのありとせば、夫こそ宇宙間に於て變化の最も大なるものとなすべし。人間

生の自然の順序として極めて尋常に起り來る「死」なる小出來事の爲に、此の如き大變化を生じ得べしとは、僕焉ぞ解し得んや。世に未來の有無を問ふ者あり。未來の有無若し問ふべくは、現在の有無、更に最も問ふべきに非ざるか。現在に對しては、常見に墮し、未來に對しては、斷見に墮せるが如き、斷じて理の正を得たるものに非ず。生前より生に入り、生より死後に至るまで、通じて一。唯一貫したる不斷の法に従ふ。

以上は是れ僕が今日の見地の一斑なり。僕文を行ふこと頗る放漫、説いて盡さざる所甚多きが故に、或は恐る、諸兄の一笑を買ふに止らんことを。然れども、僕は唯之によりて、諸兄と僕と其の見を異にすることを明にすれば足れり。其の見既に異

なり。我徒が六個の浩汎なる綱領によつて立てる間こそ、僕の如き異見者も、諸兄の驥尾に附して犬馬の勞を取ることを得たれ。既に一定の信條を限定して、其の方針に動かんとするに至つては、僕焉ぞ安んじて留まることを得んや。

是れ僕の去らんとする所以の二也。

如上の燕言能く僕をして同志會幹部を去らしむることを得ば幸甚也。敬具 (三十七年八月、新佛教)

時子

一、電話

月も日も忘れたが、何でも一昨年の春の初の或夜一時過、僕が第三版の編輯を終つて、愈々之から宿直室に引籠らうとしかけた時、突然ちりんくとけたましく電話の鈴が鳴り出した。折しも、四邊に給仕も居らず、せうことなしに、編輯長自身電話の口に立つて、受話器を耳にあてると、之はしたり、あだめいた女の聲だ。『杉村さんがお出でならば、誠に恐れ入ります。一寸電話口迄呼んで下さい。』と言つて來た。『僕は杉村です。』と答へると、『卿は杉村さんなの？ほんとうに卿が杉

村さん？ほうとう？』と再三再四念を押す。ゴールドスミツスの著『ウェークフィールドの和上』中に、ドクトル、ブルムロイズが或る見識らぬ人から、『卿があのだクトルでしたか』と問ひかけられて、何だか面目を施したやうな気がしたと書いてあつたが、之と反對に、斯う繰り返し、僕の名を聞き直されては何だか冷かされたやうな気がして、氣になつて堪らぬ兎角の押問答の末、漸く僕の杉村たることが分れば、今度は對手から、『妾分つて？』と來た。——其の言葉の調子から考へると、何しても藝妓らしい。

僕は一人の藝妓の名前も知らぬといふほどの「大道徳家」でもないが、さりとて新橋柳橋日本橋葎町に何千とある藝妓の

名前を、一々片端から其の聲で言ひ當てるといふほどの「風流才子」でもない。『妾分つて？』のお尋には僕少からず狼狽して、我にもあらずもぢくしながら、何も分らぬと答へると、今度は女の方で、ずつと聲を落して、『妾時子ですがね』と、初めて名乗を上げた。

其の時子なら、僕にも分つてゐる。

二、時子

前年戦争が始つて間もなく、僕は故郷の代議士兩三と、柳橋のさる所で會したことがある。時子と會つたのは此の時である。其の席には外に四五人の藝妓も半玉もゐたが、時子の名だけが不思議に僕の頭にのこつた。時子は面長な、色の白い、眼の

大きな女で、年の頃二十一二、何處となく利かぬ氣らしい氣象が眉宇の間に顯はれてゐる。少し鼻にかゝつた聲ではあるが、言葉使ひがきび／＼して、聞いてゐても小氣味が宜い。之がうかとして、時々名古屋辯を交へるので其の度毎に皆に笑はれては、其の度毎に大きな目を見張つて怒つた。何でも此の夜一同で書端書の回しがきをした折、僕が時子のフアウンテン、ベンを繕つてやつたのが初まりで、フアウンテン、ベン論が大分其の席で喧しかつたやうに記えてゐる。

其の後、處は變るが三四度此の女に會つたことがある。回向院の一月場所でも會つた。此の時は四五人の朋輩と一緒に後正面の棧敷に来て居たが、遙か右の方の西の溜の後にゐた僕を

見つけて、軽く遠方から目禮したので、僕は不思議な女だと思つた。藝妓などいふものは、斯な席で成るべく自ら人の目を避けるものと、僕は心得てゐたのである。

其の内、時子の噂もいろ／＼と聞いた。舞踏が大の得意で、三味線も旨いし、歌も上手だといふ暇があると、質素な木綿の衣物を着て、生花茶の湯の稽古にも出かける。英語の稽古迄してゐたが、近頃教師がなくて止めてゐるとのことである。顔がよくて、藝があつて、誠に藝妓らしい藝妓だと稱ふる者さへあつたことを耳にした。

所が此の女が、商賣に似合はず、品行方正であつて、未だ會て一たびも男に關して、忌はしい噂を立てられたとがないとい

ふ話も聞いた。『彼の妓は堅いので賣れるのですよ』と、或る料理屋の主婦が僕に語つたこともある。僕も初は僞とばかり思つたが、後に人の話を聞くと、萬更根のないことでないらしい。愈々不思議な女と、僕は思つた。

此の女に感心なことがまだ一つある。彼は自分の稼いだ中から學資を作つて、其の一人の弟を高等學校に通はせてゐる。行く／＼は大學に入れて、弟だけはせめて人並の地位に立たせたいといふ望ださうな。但し此の事が弟の友達に知れでもすれば、弟の面目を潰させて可哀想だといふので、固く其の名を秘して、未だ曾て人に語らぬといふ。

兎に角、時子が風の變つた女であることだけは慥だ。此の風

の變つた女から、今しも電話がかゝつたのである。

三、嫌疑

『卿に斯ういふことをお願ひしては、誠にすまないと思ひますが、』といふのを冒頭にして、時子の語るのを聞くと、

其の日から二日ほど前の○○新聞に時子のことが出た。出たのは時子に取つて極めて利益のある記事であるが、其の末に時子の抱主の主婦のことが、手厳しく攻撃されてゐる。此の新聞を見た時には、何の氣もなく、主婦の目に入れて氣を悪くさせまいと思ふばかりに、其のまゝ引裂いて棄て、了つた。所が、世には又餘計な世話を焼くものがあつて、能々其の記事を切り抜いて時子が朋輩の所へ送つて來た者がある。平生時子

が品行方正の名で賣れるのを氣にしてゐた朋輩は、得たり賢しと、早速之を主婦に見せたので、主婦は赫と怒つて、時子でなければ知らぬことを、斯う明らさまに書いたのは、時子が新聞屋に頼んで、書いて貰つたに相違なしといきまいた。其の新聞を引裂いて棄てたのが、何よりの證據だといふことに迄相成つた。時子に快からぬ朋輩は、手を拍つて喜んで、尻から主婦を焚きつけたので、主婦の怒の火の手は益々高くなつた。――「ま何したら宜でせうねえ」と、時子は震へ聲になつて來た。電話機の彼方で泣いてゐるらしい。

會話が長いので、交換手からは、度々「お話中ですか」の催促が來る。夜は段々深けて、燃え残る暖爐の火は次第に冷たくなる。

大組が何時しか濟んで、早や鑄造場へ下りたものと見えて、とん／＼と紙型を叩く音が聞え始めた。

「辛い／＼暇を拵へて、今頃電話をお掛けするんですから、能うく聞いて下さいな」と又始めた。僕も可哀想とは思ふが、さて、東京朝日新聞第三版編輯主任が、何として見やうもない。結局何うして呉れといふのかと聞くと、何でも角でも、記事の出局が自分でないことを、明に主婦に證據立てたいから、何にかして、その新聞の種が何處から出て誰の手で書いたものか、調べて呉れ、之は後生一生のお頼だといふ。而して最後に又聲を落して、『實は卿も疑られてよ』と附け加へた。僕はぎよつとした。

僕は新聞の三面記事なるものを見る毎に、一度何處かの新聞に、僕がさる女と怪しいとか、又は何處かで金を張請つたとか、いふやうなことを誠にやかに書かれて見たいと思つてゐた。斯いふ記事が出た時、僕が果して悠然として、廬山の面目は他が看るに任すとすまして居られるかどうか、試して見たいと思つたからである。所が今現に『實は卿も疑られてよ』と言はれると、俄に顔の色が颯と變つて聲まで震へた。——嗚呼、僕もまだ中々修行が足らぬ。

時子の難儀を救ふといふよりは、寧ろ此の清淨潔白な積りの僕を疑つた主婦の鼻を拉いで呉れやうといふ考から、僕は兎に角頼の次第其の儘には置かぬと引受けて、初めて電話を

切つた。——第三版が印刷にかゝつて輪轉機がぐわら／＼と鳴り初めた。

四、新聞

念の爲に、時子の言つた○○新聞の綴込を取り出して見ると、成程二日程前の『霞町だより』といふ項の中に、次のやうな記事が出てゐる。

××の時子(二十二)は男嫌ひの評判者なるが、深川の羽織師時代は、男嫌ひといふ者あまり珍しくも非ざりしが、今日は不見轉専門の全盛時代なれば、偶々男嫌ひと名乗る者あれば、そは頗る珍らしく、野次馬的客連は我こそと競ふて聘ぶやうになる理なるが、此時子も夫れに洩れず、非常に忙はし

く毎日△△のみにても四五回の座敷を勤むる由。此妓の感心なるは唯これのみに限らずして、實弟を某中學へ通はせ、月に廿圓の仕送りをなし居るといふが、此家の女將は箱屋上りなれば、凡べてに算盤強く、その廿圓は無駄物の如くに云ひなし、幾らかでも自分の懐中へ入れたき所存なりとは、不心得の骨頂なり。斯の如くなれば、割烹店待合、或は女中への附け届けは思ふ半分もせざれば、座敷へ出て居る者は肩身が狭く、夫れ故時子は自腹にて、凡べての附け届けを十分になし居れば、三方四方の評判よく益々流行るとは爾もあるべきことなり。

之を讀んだ時、僕は何處の國でも善人は窘めらるゝものだ

思つた。○○や××や△△を明に公にする時機も、追々には來るだらうとは思ふが、今は此の儘にしておく。

五、細君

翌日宅へ歸つて、昨夜の次第を妻に語ると、僕の細君なるものは非常に感心して、大に同情を時子に寄せた。僕の友人に何某といふ變り者があつて、學校を卒業すると其の儘、何かの職に就いては、餘りに平凡で面白くないといふので、先づ二三年鎌倉へ引籠つて、座禪でも組まうと考へついた。二三友人に諮詢つて見たが、誰も賛成しない。到頭最後に、其の嘗て師事した福澤先生の所へ行つて相談したところが、先生之大賛成を表した上、諄々と今時の書生が學校の卒業を待ち兼ねて、度胸も

定らぬ辯に、直ぐ社會へ飛び出さうとあせる不心得を説き、何でも、人事の成敗は、三五年の遲速を争ふものでないから、是非座禪でもやつて、先づ腹を拵へたが宜からうと、反覆鄭寧に説かれたといふことがある。之を聞いた僕の友人は、平生斯んなことに大反對な先生のこととして、頭からがみくくと叱り付けられると、覺悟して出かけた所、其の結果が斯う意外であつたので、正に一代の面目を施して引き下つたさうな僕の女房と福澤先生とを一つにするのは、不倫の甚しいものであるが、案外な同情を、案外なものに寄せた所は、二者や、其の揆を一にしてゐると、僕は一寸嬉しかつた。

尤も、僕の家内が同情を寄せるにも、一應理由がないでもな

い。今から十餘年前、彼がまだ僕の宅へ來ない時のことだが、或年其の里の宅が軍隊に徵發されて、一時二十人許りの兵士を宿らせたことがある。彼此二三週間滞在の後、一同は東京へ引き上げたが、間もなく東京のあらゆる新聞に不都合千萬の記事が出た。記憶の宜い人はまだ覚えてゐるかも知れぬが、子爵○○○○の脱營事件として、一時喧しかつたものだ。此の子爵といふものは、其の後除族になつて、位記返上を命せられて、今では、四谷邊の蕎麥屋の出前持とかに、成り下つてゐるさうだが、之が右の家内の里に宿つた軍隊の中に居つた所で、此の男は、入營前から不身持に身を持ち崩して、其處此處の女と怪しい關係を結んだことも、數を知らぬ位であつたが、之が東京へ歸

つて程なく脱營して、夫から又程なく捕へられた。捕へられて後、憲兵屯所で訊問に應じて喋り散らした中には、僕の家内とも怪しい中であつたといふこと、家内の兩親も相手が子爵といふのを見込んで、内々娘を唆したといふやうな、根も葉もないことがあつた。斯なことが、ぱつと東京中の新聞へ出たのだから、流石に平生は暢氣な家内も、悲しいやら、口惜しいやらで、毎日一室に立て籠つて、泣き暮し、泣き明かし、果は海の中へ身を投げて死なうかと迄、思ひつめたこともあつたさうな。——

此の時の事情は其の頃、「時事」にゐた「朝日」の土屋元作君、「毎日」にゐた横山源之助君、「讀賣」にゐた今の「實業之日本」社の増田義一君などが、其の取消運動に盡力して呉れたので、能く

知つてゐる筈だ。前年物故した古河老川君が病餘の筆を呵して、「中央公論」の紙上で、新聞の三面記者を罵つたのも、此の時の事で、之は收めて老川遺稿の中に在る。

斯ういふ目に遭つたことのあればこそ、妻は時子の事情を氣の毒がつて、是非何とかして助けてやれと、僕に忠告したのである。

話頭は飛でもない横道に入つた。

六、密會

のろい話だが、僕は家内に激厲されて、其の日直ぐ霞町の或る料理屋へ出かけて、時子呼びにやつた。僕に毛頭後めいた所はないが、場所が場所なら、相手も相手であるだけに、つまら

ぬ嫌疑を蒙つて、痛くもない腹を探らるゝのは厭だ。夫が厭さに、日のてか〜と照る眞晝間を撰んで、態と茶ばかり飲んで、酒も飲まず物も食はなかつた。――僕等がひそ〜と話してゐる中、廊下を通りかゝつた此處の女中が、閉切つた小さな室の中に男女の聲がするのを怪んで、朋輩に耳打すると、僕と時子だといふを聞いて、『夫では問題にならないわねえ』と言つて、二人で笑つたさうな。僕は後で之を聞いて、頗る意を強うした。自ら省みて疚しからずんば、中夜酒を酌み交しながら話した所が何あらうか。僕は今更用心ならぬ用心を重ねた愚を恥ぢた。思へば僕もまだ〜修行が足らぬ。

時子が此の日の物語は、山鳥の尾のしだり尾の、夫は〜長

長しいものであつた。今一々之を書き立てる暇もないし、あつた所で、大方は忘れて了つた。唯其の中、耳に止つた節々だけを摘んで見ると、先づ斯うだ。

時子は、岐阜だか大垣だかの、士族の娘であつたが、家の貧苦を助けんが爲とて、幼い時分に身を賣られた。東京へ賣られたのだから、初め名古屋へ賣られて、更に東京へ賣り飛ばされたのだか、僕は今何方とも記憶せぬ。何れにしても格別の大事ぢやない。

間もなく半玉となつて顯はれたが、生來利かぬ氣の彼は、幼な心にも飽迄意地を立て通して、一生連れ添ふ見込のある男ならば知らぬこと、其の外にとては、斷じて男は持つまいと心

を決めた自分ではさう心を定めたが抱主は中々承知せぬ威
し賺しつ、様々に説き立てる。此方は頑として應せぬ之が爲に
結局平和が破れて、外の抱主へ轉じたことも一二度あるさう
な。

辛かつたのは、之ばかりでない。自分हतとひ男を持たずと
も、稼げる丈は稼いで見せるといふ積で、お稽古も勉強すれば、
お座敷も勉強する男嫌ひといふのが追々に賣物になつて、藝
妓風情の一寸出入し悪い高貴の方々へも、屢々招かれること
になる。夫や此やで、抱主の方は追々我を折つて、時子は到底普
通の藝妓のやうに操を賣らせることの出来ぬものと諦らぬ
て了つたが、さて今度は、朋輩の方から苛めぬかれることゝな

つた。一つ家に居ながら、丸で他人同様打解けて語り合ふこと
もないのは愚か、朋輩相集つては、あてこすりに様々のことを
言ふ。あてこすりの果は、忌味となり、悪口となり、時子さんは餘
所で宅の妓を不見轉許りと罵つたとか、時子は宜い衆の所へ
出入するのを鼻にかけて、人を人とも思はぬとか、夫はく散
散の悪たいをつく。之が爲めに、お座敷から歸つて、其のまゝ衣
物も着かへず、夜一夜泣き明したことが幾度あるか知れぬと
いふ。——成程、十五六の幼い身の上で、遠く兩親とは離れて、杖
柱と頼む抱主や朋輩から、斯う苛められたのでは、泣き明した
のも無理はないと、僕は思つた。

併し、世の中は妙なもので、遊冶郎許りの集まる花柳の巷に

も、時子の憐むべき境遇に眞個の同情を寄せる者が、續々出て来て、時子は非常に賣れ出した。中にも時子保護會といふを組織して、月々幾何の金を出し合つて、飽迄時子の素志を貫徹させやうとした、義侠心のある人々迄顯はれた。而して其の所謂保護會なるもの、會員はと聞いて見ると、會長を初め、孰も知名の人ばかり。僕はまんざら其の名を記えてゐぬでもないが、之を公にしては折角の好意を無にする恐があるから、之も姑く差控へて置く。

斯くて、此の日の物語は、長々しい身の上話から始つて、昨夜の電話で頼まれたとに語り及び、最後に、逆も此の調子では、長く今の勤も出来まいから、新聞事件の明りを立てた後は、一時

も早く自前になりたいたいといふことで結んだ。尤も自前となるには、金も要れば、抱主との談判も中々骨が折れさうだから愈愈之もいけぬと定れば、寧ろ田舎へ引込んで、舊藩主の御殿へ女中にでも置いて貰はうかと思つてゐるとのことであつた。

七、探訪

此處迄の僕の行動は、天晴れ婦人敬愛の爲に名利を棄てた中世騎士の係を存したが、之から先は頗るまづかつた。

時子から頼まれたことは、早速係の方に頼んで取り調べさせたが、何うしても分らぬ。元來何處の新聞社でも、原稿の出版は一切秘密に附することになつてゐるから、之が朝日新聞社に出たものであつたら、一も二もなく初から斷るのであつた。

が唯今度の〇〇新聞は、夫ほど堅くるしくはあるまいと考へて、探訪に手を盡して見たが、中々さう容易くは行かぬ。やつと二週間程かゝつて、初めて、大凡そ材料の出所と執筆者の名とが分つたので、取り敢へず、其の由先方へ報せておいた。

先方からは禮狀に添へて、出来るなら、僕の報せた出所の、今一つ先を探つて見て呉れぬか、との頼であつたが、其の頃僕は非常に忙しかつたので、ついでに其のまゝになつて仕舞つた。

八、和解

夫から二月か三月経つて後、日本鐵道會社の創立記念祝賀會か何かで、歌舞伎座へ出掛けた所、丁度折ふし、其の接待役に雇はれて來て居た時子と、ばつたり出逢つた。

大勢の前として、委しい話も聞かなかつたが、其の後色々手を盡して、材料の出處が何處とかの女中であるのをつきとめたこと、其の女中は今もう其處に居ないこと、夫から執筆者といふ某新聞の記者にも逢つたことなど語つて、最後に『お母さん(主婦のこと)の機嫌も直つて、今は無事に勤めて居る』とのこと、を附け加へた。

是も全く卿のお蔭だとして、頻に禮を言つた後、菓子やら、果物やら、煙草やら、辨當やら、酒やらを盛に何處からか仕入れて來て、くすくす笑ひながら持つて來て呉れた。

九、失踪

歌舞伎座で逢つた以來、夫れ切り、僕は時子と會はなかつた。

僕は其の年の夏に朝鮮から滿洲の方へ出かけ、秋には長い間病氣をして、夫が治ると、直ぐ京都邊へ遊びに行つたので、夫や此やで、時子の噂を久しく耳にしなかつたが、其の冬になつて、初めて時子が此の夏以來脱走して、何處へ行つたか、行方が知れぬといふことを聞いた。

女中に聞いても、朋輩に尋ねても、誰れ一人慥に知つた者はなかつた。其の中様々の風評があつて、抱主と喧嘩して田舎へ歸つたといふもある、東京の何處とかに隠れてゐるといふもある、亞米利加へ行つたさうなといふもあれば、濱町とかで、餘り立派でない身扮をして、髪も亂れた儘、青い顔で歩いてゐるを見たといふ者もあつた。

兎角する中、明治四十年は暮れて了つた。

十、邂逅

明治四十一年の一月某の日の朝、ひよつくりと僕は新橋博品館の前で、時子に邂逅した。僕の姿を見るなり寄つて来て、色話があるから是非聞いて呉れといふ。見ればちみな絲織か何かの衣物を着て、髪は庇髪にしてある。何うしても女學生上りの奥様としか見えぬ。之ならば大丈夫といふので、僕はぶらぶらと銀座を歩きながら、其の所謂色々な話を聞いた。

脱走したこと、病氣したこと、困つたこと、哀しかつたこと、成程色々あつた。結局前の抱主と手を切つて、愈々近日自前で出

る積りであること、名も元の通り時子のまゝでおくから、何か時々呼んで呉れといふことであつた。

僕が藝妓と銀座通りをぶらついたといふのを聞いて、「君は危ないことをするにも程がある。人に見つかつたら何する」と忠告して呉れた友人があつた。僕は此の友人よりも慥に修行が進んでゐると思つた。

十一、自前

其の頃から、僕の身は急に忙しくなつた。ジエームス、タウンの萬國博覧會が開ける、筑波千歳が遣米艦隊として出發することになる、之には黒木大將も行かるゝといふ、一方には、伏見宮殿下が遣英大使として、倫敦へ向はせられるといふ、山本西

の兩大將が宮殿下を追うて巴里へ向ふことゝなる。一月から二月へかけて、僕の受持の方面は目の回るほど忙しくなつた。而して遂に、僕までが社の特派員として、倫敦へ出張することとなつて了つた。時子が果して自前で出たか何か、そんなことを尋ねるところでなかつた。

僕は三月五日東京を發して、歐羅巴の國々を経廻つた後、六月の中頃に敦賀へ歸つた。敦賀から大阪の本社に寄つて、其の次に父上の墓詣にとて、故郷の和歌山へ歸つたが、思ひもかけず、此處で初めて、博品館の前以來消息を知らなかつた時子の消息が分つた。といふのは僕が時子と初めて會つた時、代議士連と同席した故郷の友人が、此の春上京して之に出逢つた

といふのである。時子が今は立派な自前で出て、而も大變な流行兒となつてゐる由を、此處で聞いた時は、僕も何だが重荷を下した様な心地がして、胸撫で下した。人間は妙な所に力瘤を入れるものだ、僕は我ながら可笑しかつた。

十二、再會

今年の正月、例の霞町の料理屋で、僕は年始歸りに立ち寄つて、晝餐を喫めてゐると、丁度隣の座敷に來合せてゐた時子が挨拶にとてやつて來た。久しぶりの面會である。

彼が自前になる前後の、辛かつた悲しかつた事情を、事も細やかにしんみりと物語つた後、何と思つたか突然、「妾もう一生藝妓する積に定めてよ」と言ひ出した。

僕は大賛成を表した。一體世の中に藝妓ほど命の短いものはない。之が流行兒になるほど、尙以て短かい。少し顔馴染になると、早くも落籍されるか、廢業するか、轉籍して居なくなる。若し一年二年丸で此の類の席に出ることがなかつたら、今度行つて見た時、もう半分は知らない顔になつてゐる。夫れ婦女子を玩弄物同様に玩んで、昨夜は百年の契を盟ひながら今朝既に弊履の如く棄て、願みず、今日比翼連理を口にして、他が操を破りおきながら、明日會すれば、はや行路の人にも似たる、世の所謂嫖客の類ならば、朝々暮々相手を代へて巫山戯まはる所に、面白い所があるのかも知れぬ。併しさういふ「男らしい」との出來ぬ僕などに取つては、藝妓を罪のない無邪氣な話相

手として殆ど友達と同じやうに心得てゐるので、之が束の間に入れ代り立ち代るのは甚だ興の覺めるものである。偶ま十年二十年と勤めた老妓もないでないが、此等は多く道楽三昧を仕盡して後、もう早や藝妓以外に一頭地を抜くことの出来ぬ輩ばかりである。斯な奴を相手にした所が面白いものでも何でもない。だから然るべき女の藝妓商賣を一種の藝術と心得て、終生を之に投ずる者の出で來らんことは、僕が豫て希望する所であつた。此の意味を以て、僕は賛成を表したのである。

賛成と同時に、僕は時子に向つて結婚を勧めた。男にもせよ女にもせよ、獨身などいふ不自然なことで一生を送る者は、考

が僻んで常識が缺けて來る。随つて身の治りもつかず、心の中に始終希望といふものがない。朝に吳人を迎へ、夕に越人を送る底のことは、無論女の最も恥づべきことであるが、正當なものと正當に結婚するなら、誰れ苦情をいふものでない。夫も今日迄操を賣ることに依つてのみ名を成した、あり來たりの現代の醜業婦者流ならば、或は結婚に依つて人氣を落すといふこともあらうが、此の點に於ては、堅い女と評判を取つた時子などに、毛頭其の方の心配はいるまい。愈々結婚するとならば、望むらくは如何はしい藝人風情を夫にせずして、歴とした紳士に連れ添ひ、家内が一生文字通りの藝妓を勤むる由を合點させた上、此處に夫となり妻となつて、堂々たる中流の家庭を

形づくると、僕は勧めた。

笑ふこと勿れ、是は僕が年來の持論である。此の持論に、僕は西洋の女優やら音楽家やらの例を引き加へて、滔々數百言、本氣になつて辯し立てた。すると初の程は笑ひながら半ば馬鹿にして聽いてゐた時子が、段々熱心に聞き入つて來て、到頭僕の長談議が終つた頃になつて、彼は潜然と泣き出した。成程、理由を聞けば、泣くだけのことはある。

十三、意中

時子は此の日初めて、其の胸中の秘密を打明けた。僕は今此に、其の打ち明けられた秘密を盡くさらけ出すほどの冷酷な心は持たぬが、僕は唯此の物語の結末をつくる爲に、手短く其

の概略を述べる。

時子には相思の中なる人があつた。時子が十七の夏、大磯へ轉地してゐる中、毎日々々海岸で顔を合せた可愛らしい十七八の少年が夫なので、之が縁となつて、互に思ひ思はれて、深く言ひ交したのであつた。所が間もなく相手は親がりの若い身空で、藝妓風情にかゝづらつては、行末が案じられるといふ親類一同の意見で、留學といふ名の下に倫敦へ追ひやられた。相分れてより此に十有餘年、双方の身の爲めにならぬといふので、双方ともに手紙の取り遣りも何もせぬ斯ういふことにかけては、根が賢しい女のことゝて、時子は思ひ切りよく、一切手紙のやりとりはせぬが、併し時子の思は十年一日の如く忘

れもせねば、衰へもしないのである。

時子の思は夫だが、相手は何思つてゐるだらうかといふと、之が亦面白い。相手といふは、さる大家の方とばかりで、時子は其の名を言はなかつたが、之が時子と分れて倫敦へ行く前に、両親とも相談の上で、歸朝の上は、必ず時子を妻にするとの約束で出かけた。母親も承知である、兄弟も承知である上のこととして、時子は屢々此の家へ出入するが、母親も兄弟も物優しい方ばかりで、時子々と宅の者の様にして呉れる。時子が失踪して落魄を極めた時などは、弟の學資に困るだらうとて、態々人傳にその母なる人から金を届けさせたことさへある。時子の氣象を飲み込んでゐる母親のことだから、夫と明らさまに

言つては受取るまいとて、人から人を傳つて渡さうとしたが、夫と悟つて、時子は斷乎として斷つたといふ。大家のことゝて、時々此の家で、大宴會の催さるゝ時などは、時子も藝妓として招かれることがある。世間體を憚つて、表向には藝妓で通つて行くが、陰では其の弟などから、姉さん〜と呼ばれるのだからな。

時子は、相手が身分のある人といふので、行末を慮つて飽く迄も品行を慎み、只管其の名を傷つけざらんことを心がけてゐる。遠方にゐる相手の男に事を誤らせまいと思ふ許りに、我と我が心を制して、音信一つせずにある何もかも男の身の爲に宜かれかしと、一心に其れ許り心掛けてゐるが、段々男の家

に出入しては、其の母親やら兄弟やらに優しくして貰つて見ると、此の家の家庭が段々分つて来て、何やら自分などが、此の中へ割り込んで行くのは、身分知らずのやうに見えて、却つて我が思ふ男と其の男の家に、不幸の種を蒔くのではあるまいかといふやうなことに考へつゝいた。『夫から色々考へましてね、つまり何しても、妾の方から引くのが一番先様の爲になることだと思つて来たのですよ』と言つて、彼は涙を拭いた。

時子は斯いふ譯で、寧ろ一生藝妓で推し通さうと決定したのである。僕の結婚論は之が爲に頗る平凡なものになつて了つたが、お蔭で此の物語は、大分小説めいて来た。

十四、先様

時子は其の名を言はなかつたが、僕の方では、商賣だけに、いくらも探り出す便宜がある。事の次手に夫となく探りを入れて見ると、果して直ぐ相手の男の何者たるかは分つた。成程、相手の迷惑を思つて時子が之を隠したのも無理はない。彼は日本に於ける鑛山業の王なる某家の當主の兄であつた。兄の身にして、父の名跡を繼がぬといふは不思議のやうだが、之には理由がある。其の母なる人はもと新橋の藝妓であつて、之が某家に嫁いで後に出来たのが、今の當主で、兄は其の前に出来た子なのだといふ。而して胤は同じかときくと、曰く然らず、兄なるものは某陸軍大將の落胤と。

僕が此處に其の名を打明けたら、恐らく讀者の中で之を聞

き知つて居らぬ人はあるまい。之を知つた僕は、時子が相手の身の爲を思つて、自ら身を退けやうとした心掛の、藝妓らしからぬに驚いた。併し其の所謂相手の名は堅く僕の胸中に秘しておく。

十五、奇遇

夫から二月経つて、僕は又もや、亞米利加から歐羅巴へ廻ることになつた。

其の旅行中、五月の某の日某の刻に、倫敦の某の所で、僕は其の名をのみ聞いてゐた、時子が意中の人に逢つた。——逢ひは逢つたが、時子が何でこんな男に惚れたかを、疑はざるを得なかつた。

十六、結末

僕が日本に歸つて後、間もなく、彼も七八年ぶりで、日本に歸つた。男は宜し、金はある、彼は新橋柳橋の藝妓どもに大騒ぎせられて、時子などには、見向きもしない。而して近く某大家の令嬢と華燭の典を擧ぐるといふ説もある。

時子はいふと、其の後次第々々に人氣を加へて、其の流行ることは何人も驚く許り。何でも一週間前ばかり前からかけておかねば、逆もお座敷が出来ぬといふ位の、すばらしい勢ださうだ。繁閑常なき僕等が職業として、そんなに前々からの約束は無論出来ず、偶ま思ひ出して呼びにやつても、約束やら遠出やらで、曾て一たびも逢ふ折がない。何でそんなに流行るのか

と聞けば、『そりやア顔にも藝にも由りませうが、第一は堅いといふので、お客様が安心してお呼びなされるからですよ。』とみなみな言ふ。僕は逢はなくとも、斯う聞くと嬉しかつた。嗚呼暗黒と見えた花柳の巷にだに、其處に一道の光明は、炳乎としてきらめいてゐる。(四十一年十二月稿、四十二年「中央公論」所載)

●「正法輪」に答ふ(學林と専門道場とを如何に調和すべきか)

一個半個參玄の上士を打出せんことを思はずして、無暗に坊主を多く作り、用にも足らぬ法寺を保持せんことを思へばこそ斯る問題も生ずるなれ。坊主などはなくともありなん。之にて寺院の維持がむづかしくあらば、叩き毀したりとて何かは妨げんや。今の禪僧と今の禪寺と皆な盡く亡び去つて此に初めて「禪宗の教育」成る也。(四十一年三月)

西八條の舊居

飄然と身は七條停車場へ下り立つた。今朝から降りつく六月のちばたら雨は、まだ小歇もなく降つてゐる。

昨日世界一周の旅から敦賀に歸つて、今日しも之から大阪へ出やうといふ途中である。京都の友人から晚餐の案内があつたので、兎も角もとて今此處へ下りは下りたが、八時に祇園の一方迄來いといふ案内には、まだ二時間許り早い。ふと思ひついて、左の方西八條の方へと足を向ける。

思へば、十二年前此の京都を落ち延びて以來、今日迄の間に、用あつて此處へ來たことは、幾度といふ數を知らぬほどであ

るが、未だ曾て一たびも、母と唯二人、わびしけれども、心おきな
く暮した八條の舊居を尋ねたことがない昔の家は何なつて
ゐるだらうか。あの酒飲の家主は今も酒を飲んでゐるだらう
か、親しく往來したお隣の杉野さんは無事でゐられるだらう
か、始終飯を食ひに出かけた鳥羽屋は、其の後段々繁昌してゐ
るだらうか、六孫王祠の池の緋鯉、東寺の塔の上の鳥出入の八
百屋、差配の大工、——様子を聞いても見たいし、都合が宜けれ
ば、尋ねても見たい。

先づそろり／＼と参らう。誠に昔は日に幾度となく通つた
道ではあるが、十年の間あひだにいつしか大分忘れて了うて、何かと
いふ中、之は早や、飛でもない東寺の裏門ぢや、雨の中を悪戯さ

うな十歳ばかりの男子が五六人連で、わちや／＼言ひながら
やつて來る孰も僕が此の邊へんに居る頃には、まだ此の世界に影
も形もなかつたものだ。其の後へ十八九の娘が二人連で、變な
容しな子を作つて、傘を傾かげながら歩いてくる。之なども、其の頃は
鼻垂らしの腕白わんぱくものであつたらうに、見た所ところでは、今や正に八
條九條の社交界しやうかいに覇を稱してゐるらしい。思ふに、人知れず之
に思を運はんでゐる若人わかうともないではあるまいと考へつくと、嗚
呼十年は一昔ひとせがしだつたなといやになる。

裏門から入つて、東寺の中をつき貫ける。心字の池の邊り、五
重の塔の下、木立物古りた庭の面など、境内の様は、其の昔、二十
一日の大師だいしの縁日や、六齋念佛や、村の盆踊ばんやどりに來て見た時と一

向變つて居らぬ表門おどてもんに出ると、門際もんざはにあつた精進料理の鳥羽屋が、何時いつしか消えて失くなつて、其の跡は、前栽遣水せんざいせんすいの趣ゆかしい大きな庭にはに化けてゐる。松茸飯を食たひに來たことを思おもひ出して、左ひだりながら、リツブ、ヴン、ヴン、ケルが宅へ歸つた時の様に、ぼんやりと雨あめの中に立つて見てゐたが、尋ね問ふべき人も居合あせぬので、不審々々と思ひながら、此處こゝを出る。出た外そとは、八條通櫛笥くしげ西へ入つた處。

鳥羽屋の隣となりにあつた湯屋は、依然ぜんぜんとして營業してゐる。此の邊は大分賑にぎやかになつて、人通りも餘程多おほい。ぶらり〜何處いずこを目的あてともなく、西の方ほうに向つて行くと、右側みぎがはに山内やまのうちにと表札打つた釣針屋がある。何氣なげなく二三間行き過ぎて了つたが、若し

やとばかり、急きんに思ひつく由あつて、寄つて見る。店頭みせまきには、主人とおぼしい五十近い男おとこと小僧こぞうが二人で、頻しばしばに釣針を拵こしらへてゐたが、僕の入り來るのを見て、不思議さうに僕の顔を見上げた。『山内やまのうちにさんと仰おつしやると、若しや此の裏通うらどちに住んでゐた杉村といふのを御存知ごぞんじでありますか』と聞いて見る。結界けつがいの中に坐つてゐた主人は、夫と悟さとつたか飛んで出て、『あッ先生せんせいでしたか』と呼よば、つた。如何いかにも、僕は先生である!!

此の山内釣針屋やまのうちにつりはりやでは、アーチフキシアル、フライとて、釣針の尖さきに蠅はや蜂はちの恰好かつかうに拵こしらへたものをつけた奴やつを作るのが得意であつた。之は魚が餌えさと間違へて喰くひつく爲ために造るので、之を用ふれば別に餌えさをつけるに及およばぬのである。所で或年何處どこか

の水産共進會へ初めて此のアーチフキシャル、フライを出品したところ、審査の結果第一等賞を得て、剩さへ審査官の岸上博士から、其の翌年諾威で開かるゝ萬國水産博覽會へ、是非出品するやうにとの勸告迄受けた。さて愈出品することにはなつたが、どの針は何の魚に使ふもので、價段が幾何などいふ説明は、外國文でつけなければならぬ。色々然るべき人と探して見たが、一向見つからぬので、到頭西八條切つての大學者斯くいふ僕の所へ頼みに來た。其の頃僕は丁度本願寺文學寮の教師を勤めて、母と二人八條梅小路のさる商人の別荘に住んでゐたのである。僕はお易い御用とばかり、くはしい説明書と釣針に付ける小札とを英文で書いてやつたが、其の禮にとて

此處の老主人が態々尋ねて來て、何でも玉子を一籠呉れたと記憶してゐる。間もなく僕は文學寮を追はれて東京に移つたが、其の年の暮であつたか、又は其の翌年の春であつたか、よくは覚えぬが、新聞で見ると、件のフライは諾威の博覽會で第一等金牌を得たとあつた。僕はわが事のやうに喜んで、早速祝辭を此の山内へ送つたところ、山内からは、先生のお蔭で何とか斯とかいふ禮狀が來たことがある。以來十有二年互に杳として消息を知らなかつた。

主人は僕の珍しく尋ねて來たのを非常に喜んで、茶よ菓子よと、下へも置かずもてなす。前年僕の宅へ來た老主人も、まだ達者で居て、之も七十近い老體を扶けて出て來た。お蔭でく

といふことを、一々頭に冠せて、諾威以來聖路易、彼得堡、ミラン
などで、續々一等金牌を得たとやら、随つて世界各所から注
文が來ることやら、夫が來る毎に裏通の先生が御坐つたらと、
親子二人で何時もお噂をしてゐることなどを、夫から夫
へと語つて、むさくるしいが、是非今晚は宅へ泊つて行つて呉
れと迄、言つて呉れた。何はともあれ、斯う喜んで呉れると、僕も
甚だ嬉しい。僕は其の數々の金牌を一々見せて貰つて後、今夜
は是非大阪へ下る約束だからと斷つて、此處を出た。色々の昔
談の中に、初めて、鳥羽屋の主人が妾狂ひとかをした爲に、没落
して今は行方も知れずなり、其の跡が東寺のお庭になつてゐ
るといふことを聞いた。

六孫王の社の中に一寸入つて見て、夫から僕が家の在つた
梅小路の通へ出る。見る物として、懷舊の種ならぬはない。對家
の八百屋も昔に變らず、お隣の杉野さんも元の儘だ。僕のゐた
家はと見ると、之も昔の通り表の大戸が鎖つてゐる。此の大戸
を入ると、直ぐ一軒の家があつて、此處には中村翁村の一家が
昔住つてゐた。而して、此の家の横を通つて、奥の突當りが、僕の
家であつた。家は泉水に臨んで建つて居て、縁端から見下すと、
鯉がばちくと潑ねてゐた。桃、櫻、躑躅、山茶花の類を植ゑ込
んだ物數奇な庭があつて、其の中程に小さな石橋の架つた流
があつた。其の頃十六七の美少年であつた今の翁村文學士は、
時々僕の留守中に此處へ潜び込んで來て、能く此の小川で鯉

を取つて食つたものである。庭の彼方は生垣一つを隔て、麥隴菜畝目もはるに北の方に打續いて、東には比叡の峯、西には愛宕の杜が見えた。——見えた景色は今も昔に變るまいが、家の主は變つて了つて、さうなく踏込む譯には行かぬ。様子はお隣で聞くに限ると、無沙汰の詫を兼ねて、つか／＼と杉野さんに入つた。

『十二年前お隣に居た杉村です』と呼ばゝる聲を聞いて、『まあお珍らしい』と、奥さんが飛んで出て來た。折ふし晩酌中であつた主人も杯をおいて、是非一寸上れと勸める。上れば妹娘のお千代さんがしとやかに出て來た。此の家には、姉妹二人の娘があつたが、姉さんの方は嫁入して、妹さんが残つてゐる。八つか

九つの時に見たきりののが、立派なお嬢さんになつて、僕が世界一周に出かけたこと迄、新聞で見てもやんと知つてる。其處へ僕等の話聲をきゝつけて、僕の母と仲よしであつた祖母さんの、八十の高齡にもめげず、達者にしてゐられるのが出て來る。段々賑やかになつて來た。

當時僅に母と二人暮しであつた。僕の一家に其の後、妻が來て、子供が四人出來て、總勢七人の大勢になつたことを話すと、細君は僕の母が若かつたこと、僕の文學寮から歸るのが遅いと、心配して、裏の築山の上から北の方許り眺めてゐたこと、其の時分頭から頬にかけて髯鬚を生してゐた僕が、今日却つて若くなつて、太つたことなど言ひ出す。祖母さんは、鹿兒島とか

で、當時軍醫であつた僕の母の弟に大病を治して貰つたことを、又もや語り出して、今も達者で居るかと言ふ。此の春死にましたと答へると、なせ役にも立たぬ年寄が死にませいで、若い方が先に死ぬのでせうなど、言ふ。僕の母の話が盛に出る。年は取つたが、段々達者になつて、毎日四五人の孫の世話をして呉れると聞いて、孰も大に喜んで呉れた。

中村翁村の文學士になつた話が出る。お千代さんが、此の次の世界一周會には是非連れて呉れといふ話が出る。今晚は泊つて行けといふ話が出る。此の秋になつたら茸狩を兼ねて家内一同で出かけて來いとの話も出た。お隣の松並さんとは、僕が昔の家主であつた人の様を聞くと、『松並さんもよう御酒

をあがりやはつてお騒ぎやひたが、とう／＼氣が狂やはつてお死にやひた』と、老人が言ふ。酒色に沈淪して家政麻の如く亂れた揚句、主人の死去と共に一家丸で離散隣の別莊も疾くの昔に人手に渡つたとのことだ。嗚呼此の西八條の小天地にも、僅か十年の間に浮世の榮枯盛衰はあつた。山内杉野が益々榮える一方に、あはれ、松並は亡び、鳥羽屋は潰れたのである。僕は無限の感慨に打たれて、此處を出た。

櫛笥通から島道を北に向ふと、四邊ははやひつそとして、そぼ降る雨の夕暗をとぼ／＼と辿り行くさみしさといふものはない。唯普通つた洗月樓といふ温泉宿が、立派なお茶屋になつてゐて、時々賑やかな笑ひ聲が、人を嘲るやうに奥の方から

聞える許り、僕が之れを横目に見て、泥靴の足許重げに、此の片側町のぬかるみを歩いてゐる様、何しても、昨日西洋から歸つた人とは見えぬ。嗚呼、亞米利加、歐羅巴では、世界一周會の花形役者として、さしも持囃された僕である。八條では、杉野山内であんなに迄珍らしがられて、下へも置かずもてなされた僕である。之から一力へ行けばとて、僕は上客とあつて、主人側にも女中にもちやほやさるべき身の上である。今晚大阪の社へ歸れば、僕は凱旋の將軍の様に歓迎されるに極つてゐる。さて夫れから愈々大森の宅へ歸るとなつたら、名にしおふ世界一周一百日の長旅から歸つたことゝ、母を初め妻も子供も待ちあぐんで迎へて呉れるに相違ない。而して、其の僕が、八條を踏

み出して二三町、一力に着く迄に僅か十餘町の此處此の處まで來ると、此のさみしい雨の夜の暗のぬかるみを、泥靴の足おもげに歩き艱んでゐても、誰一人ふり返つて見て呉れる者もない。唯洗月樓上、人の氣も知らずに、たかぐと笑ふ聲が聞ゆるばかり。

好矣、是れだ、是れだ。(四十二年一月、新佛教)

斜に觀たる紀州

一 高野山の糞

牟婁新報の毛利柴菴君と同行唯二人、高野の山に登り着くと、其の儘、國寶展覽會や、金剛峰寺や、奥の院や、弘法大師入定の跡などいふ、そんな平凡なものには脇目も呉れず、直に案内一人を雇つて、一目散に二里近い山坂を熊野街道へと駆けつけた。大瀧村といふのから横に曲つて、荆棘參差たる木樵道を遮二無二進めば、潺湲たる谷川に突き當る。今度は木の根岩角に掴まつて、或時は川べりを傳ひ、或時はぢやぶくと水を渡

つて登ること十町許り此の邊には奇巖怪石屏風の如く突立ち、其の上には松、杉、檜、樅、高野槇など鬱々と立茂つて、石楠花、躑躅、山櫻の花が其の間にやさしく咲いてゐる。とある岩角を一つ回ると、其の正面には、白布を引いたやうに落ちかゝる十餘丈の飛瀑、鬱々として音は木精に響き渡る。——僕等は此の瀧を見て、我知らずぶつと吹出した。

高野に參つたことのある人の中には、氣の附いた者もあらうが、元來高野山中の便所なるものは、孰も一種特別の仕掛になつてゐる。四十八谷を流るゝ清水を、各戸で笕に引いて、之が飲水にも、使水にも、使はれた後の下水と、晝夜を分たず滾々と流るゝ笕の水の餘りとは、孰も便所の下を流れて行くのであ

る廁の下には汚らしい糞壺もなければ、小便桶もない。V字形に削つた石の小溝が、上から落ちる大小便を受けて、夫が右に言つた水で、絶えず流し出されるから、日本中で高野の便所ほど清潔にして、且臭氣も何もないものは、先々外にあるまい。此の便所の下の小溝を流れた汚水は、其の後何なるかといふと、埋設下水のやうな暗渠となつて、地下を流れて、末は俗に汚土川と唱ふる細い小さい小川に出る。高野に參つて氣をつけて歩くと、道側の小溝の石垣に、處々杉葉の小枝を挟んだのが目につく。之が即ち暗渠から出る糞尿の排口で、杉葉を覆せたのは、汚しい物を人目に觸れさせまいとの用意に過ぎぬ。所で此の汚土川の小溝は、彼地此地から集つて、汚土川の本流ともい

ふべき小川に合し、之が更に高野の奥の院の道の一の橋の下から、山奥を流るゝこと五十餘町にして、其の末遂に一條の飛瀑となる。僕等が今見てゐる所の瀧は、即ち夫だ。此の瀧が高野全山の糞を集めて流し下す所だと思ふと、可笑しくて堪らぬ。瀧の名を大瀧と云ふ。大瀧村の名の起る所である。又一には糞瀧ともいふ。高野全村の民が日々夜々に垂れ流す所の糞尿は、其の色の濃きと淡きと、其の香の高きと薄きとを問はず、一切合財盡く落ちて流れて、此處にたぎり下るのであるから、糞瀧の名は、蓋し其の當を得てゐる。初め糞瀧の名と其の噂を聞いた所では、何でも瀧の色がやゝ黄色を帯びて、其處等の岩々には山吹色のが大分くツついてゐるとのことであつた。尤も

糞も此處迄來ると、色こそ残り、臭氣も何も亡くなる、唯昨今の日和續きでは臭いかも知れぬとのことであつた。併し實地來て見ると、流石に河水の自淨作用で、汚物は五十餘町の間を追に沈澱して、今は瀧壺の一段下の淀んだ深みに、やゝ濁つた所が見ゆる許り、嗅いだとて臭くもない、手に掬へばとて、掬んだ所だけでは透明である。一寸嘗めて見やうかと思つたが、――ベッ！ベッ！流石に其の勇氣は出なかつた。

糞瀧と聞けばこそ、薄汚いが、颯と落下る水は雲と凝り雪と散つて、見た所何の變りもない。何の變りもないどころか、随分此の瀧壺の中で水を浴びる人さへある。現に柴菴君も其の一人ださうだ。瀧の上流には製材所もあつて、此處からどんく

材木を流す、又此の瀧の下に出來る鮭は、人糞肥料の利目にも由るものか、肉が肥えて脂肪が乗つて旨いといふので、近邊から釣に出て來る人も大分ある。瀧の下流は此處から八九里鮎堰といふ處に行く迄は、眞個に澄み切らぬ。鮎も是より上へは上らぬといふので、鮎堰といふのださうだが、其の又鮎が滅法界旨いといふ。更に二十餘里の下手に至つて、川が有田川に合して、箕島を流るゝ頃、此の水を使つて酒を造る。其の酒の味が何うしても外では眞似が出來ぬといふ。まさかに二十幾里もついて回る譯ではあるまいが、兎に角そんな話がある。

瀧を見終つて後は、例の平凡なものに目も呉れず、其の儘和歌山へ歸つた。糞瀧は誠に以て天下の珍瀧である。

二 山田の春秋閣

有田の郡湯淺町から一里ばかり山の手へ入つた處に、今は湯淺町の一區となつてゐる山田といふ小村がある。戸數を問へば僅に百軒、而も此の百戸の小村に事も怪しや、圖書館もあれば、博物館もある。

元來此の山田村は、其の昔紀州の利者であつた、田邊藩主安藤帶刀の所領といふので、村民は虎の威を借る狐同様、孰れも我意暴慢の振舞、傍若無人を極めた上に、大酒は食ふ、賭博は打つ、而して屢隣村と喧嘩をする。其の頃此の邊で「山田者」と言へば、誰一人相手にしなかつた位だといふ。斯ういふ村の遺風を

受けて人氣は悪く、村は貧乏を極めて、手もつけられぬ始末であつたのを、此處にえらい奴が一人飛び出て來て、五七年の間に一村の面目を改めて了つた。えらい奴とは誰、姓は堂前、名は種松、本職は小學教師。

堂前君は村の一農家の子だが、其の一たび職を山田村簡易小學校に奉ずるに至つて、彼れは實に渾身の精力を擧げて、此の山田村改革の爲に盡した。學校といへばとて、無論單級制の簡易小學校、彼一人で校長とも、教師とも、小使ともなつて働いたが、其の上夜は夜學を開いて、全村の民を教化し初めた。先づ老人の爲には、老人の會を開く、母の爲には母の夜學を開く、其の外、娘の會、子守の會と、日を定めて日々夜々に此等に文字を

教へ、倫理を説いて聞かせたが、初めの間こそ馬鹿にしてゐた村民も、いつしか彼が徳に化せられて、幾年と経ぬ間に、村の風儀は見變す程に改まり、世の中は堂前先生でなければならぬといふ程になつて來た。斯く一方に村の爲に其の身を獻げながら、彼は豫て修めかけた參禪辨道を怠らず、初め天龍の岨山和尚に參して、得る所あつたが、峩山歿後は鎌倉の洪嶽和尚に參して、圓覺寺の接心といふと、村の事は暫く人に任せて、態百五十里程を遠しとせずして出かけたといふ。さう聞けば僕も圓覺寺で三四度顔を合せたことがある。破れ袴を穿いた風采の上らぬ大男であつたと記えてゐる。

斯くて、彼は一村の徳望を身に集めて、其の言ふ所行はれざるなきに至つた。前日の簡易小學校は、堂々たる尋常小學校の新築となり、更に村民の義金を集めて、春秋閣といふ圖書館と博物館を兼ねたものを建てた。行つて見ると、此の小村には不相當な立派な家を、四間に仕切つて、和漢の圖書を陳列し、別に刀劍、陶器、佛像、其の他の參考品を二間一杯に列べてゐる。此等には多く堂前君自ら私費で集めたのだといふ。博物館と言つても、何れ瓦落多許りを薄暗い部屋に轉がした位のものと思つてゐた僕は、少からず驚かされた。此處で時々諸方から品物を借り集めて、展覽會を開くが、近郷近在から來り觀る者、萬を以て數へるといふ。

彼の功勞は是ばかりでない。彼は一村の風儀を改むると同

時に、村政の經營にも力を致した結果、村は次第に富裕となつて、今では區有財産として、廣大な森林を有するに至つた。此の森林は、年毎に一萬圓の價を加へて、十年目には十萬圓になる計算であるさうな。其の曉には、之を百戸に平分して、各戸千圓づゝを手にすることゝなつてゐる。夫れや此れや、彼が村政料理の手腕を知られて、遂には町政紊亂で二進も三進も動かなくなつた。湯淺町では、町民一致彼を擧げて湯淺町長に選舉した。強て促されて彼は遂に飄然として草廬を出たのである。廣の濱口儀兵衛君に會つた時、之に誘はれて此の春秋閣に出かけた。閣の前迄迎へて呉れた堂前君を見ると、如何にも鎌倉の野狐仲間で見えた男に相違ないが、今日は前日の破袴を脱

いで、フロックコート厳しく盛に町經濟整理に關する氣焔を吐いて、胡散臭い禪談は暖氣にも出さぬ。

いざ歸らうとする時、濱口君次手に此處の學校の雪隠を見てやれといふ。小學の雪隠といへば、何處でも落書だらけの穢い物に定つたものだが、此處のは落書どころか塵一つ止めぬ。踏板から、畢隠から戸に至るまで拭き淨めて、木目鮮かに澤々してゐる。校内の掃除は生徒にもさせるが、雪隠だけは堂前校長必ず自らしたものださうな。

三 南海鐵道の急行

そほ降る雨の夕、難波から南海鐵道の最急行列車、和歌號た

ら、浪速號たらいふのに乗つた。凡そ天下ののろ臭きもの、南海鐵道に如かずで、最急行と言ひながら、僅四十一二哩の間に二時間と一分かゝる。夫れが摺違ひと言つては停車場で待たせる。電車に追ひ越されて、線路が塞がつてゐるとしては、不停車驛に停車する。殊に普通列車となると、彼れ此れ二時間半もかゝるのである。亞米利加邊には一時間八十哩も走る奴があると、いふ世の中に、さりとはのろいね、と思ひながら坐に着く。間もなく、列車の大將がやつて來た。丁寧に帽子を取つて一同を見回し。『皆様今日は御乗車下さいまして、難有う存じます。何か御乗車中御用が御座いましたら、何卒御遠慮なく御申付を願ひます』と言つて、又丁寧に挨拶して出て行つた。いや

此奴は中々話せる。僕も随分色々の汽車に乗つて見たが、列車長が挨拶に來るなどは餘り見たことがない。尤も列車長なる者も外には餘り類がない。此處の急行列車は運輸課直轄で、列車長は驛長同格のやかましい者ださうな。列車長が引込むと今度は給仕が出て來て、一同に番茶の出花を侷める。懇親會なら先づ發企人の挨拶終つて後一同に配膳といふ格だ。其處へ喫茶室の給仕の女が引札を持って來る。愈以て『酒三行にして紅裙其の間に斡旋し』といふ體裁である。

退屈紛れに一寸喫茶室へ行つて見ると、給仕の女が僕の顔をぢろ〜と見て、『お久し振でんな』と來る。如何にも久し振ぢや、そちも健固で目出たい〜とか何とか、芝居の殿様な

ら一寸願をしやくって見えをする所だが、僕は鳥打帽の半ズボン、しやくってしやくり甲斐もない願だ。

憶ひ起す、一昨年の春、僕は棕十老人と上方見物の途中、此の列車に乗つたことがある。と言つたとして、僕は棕十の甥ぢやないぞ。折柄の花見時として、並等特等共に乗客満員で、身動きもならぬ始末。坐る所か、立つてゐることも出来ない。詮方なしに、棕十と一世の智慧を絞つて、此の喫茶室へのたれ込み、チビリチビリと二時間酒を飲み通して、辛く大阪迄漕ぎつけた。其の折餘りの氣の毒さに、多少の心附を送らうとしたが、女共規則だとして、何しても受取らぬ。已むを得ず、大阪に歸つて後、心許りの品を買つて、會社に宛て送つたが、之が又會社の問題になつて、

女は運輸課長とやら旅客課長とやらに調べられて、受取る受取らぬで、大分もめ合つたさうだ。茶代祝儀の廢止も、之ほど嚴重に取締つて、始めて其の効があると僕は思つた。成程夫れから三年経て、僕は其の間に二度世界を周つて、棕十老人今亞米利加に御座る。女が久しぶりといふも無理がない。

喫茶室といふと雖も、茶許り喫ませるのでない。官線の食堂車位の料理は出来る。珈琲も此處のはやゝ珈琲臭い。茶も飲んで見ると、錫蘭の香だ。夫れに給仕には洋装の若い女を使つて、例の上方風の油臭い奴の來ぬだけ氣が利いてゐる。夫れが又滅法界物堅くて、鑑一文餘計の金を受けぬなどは、愈以て我が意を得たりだ。何でも今の専務大塚惟明君山陽鐵道仕込の新

案新案とのみ心掛けて、特に旅客の待遇に念を入れてゐるのだといふ。さう聞けば、難波の停車場に、特に婦人だけの改札口を設けた所などは何でもないことながら、其の心掛がゆかしい。

折しも列車長が來合せた。お暇ならば茶でも飲んで入らしやいと言ふと、快く席に着いて、滔々と南海鐵道の爲に氣焰を吐き出した。僕が急行の頗る不急行なるを説き出せば、先生中負けて居らず、是より以上走らせるには、機關車は勿論、鐵軌から客車の構造迄改めねば行かぬといふ。成程會社側から言へばさうかも知れぬが、乗客の方から言へば、客車どころか、會社の構造迄も改めて宜からう位のものだが、併しのろい汽車

は外にも随分あるさうな。うかとしたことを言つて擲られては大變だ。おとろし、おとろし

暮方、和歌山市驛に着いた。僕の隣にゐた何處かの主婦が、着いたと聞いて目を丸うし、『もう和歌山かのし。疾いもンやよ』——目を丸うして驚いた時でさへ、斯んな悠長な言葉を使つてゐると、僕は可笑しかつた。停車場を出ると、氣の長い國の雨として、まだゆつくりかんと降つてゐる。

四 曉天の耐久中學

上

ふと眼を覺すと、うすら淋しい殘月の光が淡く硝子窓を洩

れて、何處の隙から入る風に煽られてか窓掛がさら／＼と動いてゐる。外面はまだ暗い。遠くで鶏の聲が聞える。時計を見れば、正に午前四時。——成程、自分は昨夜から耐久中學の舎監所の二階に寝てゐたのである。

有田郡廣村の耐久中學といふは、同地の豪家濱口家の經營する所で、去年文部大臣が各地の中學を巡視した時、最もわが理想に近いものとたいへた學校である。滔々たる天下の學風が動もすれば輕佻浮華に流れんとする今日、特に此の中學の勤儉力行を主義として勉めて實用の人をのみ養はんとするに力を注ぐ點が、深く大臣のお目に留つたものだといふ。實にも勤儉力行は耐久中學の生命で、濱口梧陵翁が之を創立して

より、今日寶山校長が殆ど獻身的に其の全力を注いでゐる所も、畢竟するに皆此の主義の爲に外ならぬ。

斯の如き主義の下に立てればこそ、此の學校には職員と唱ふるものも、小使といふものも、唯一人の雇妻を除いて外に、一人もない。會計庶務、寄宿舎の世話の管々しきより、授業時間の鈴を鳴らすことに至る迄、皆教員が勤める。來客の應接、校内の灑掃一に盡く生徒が之を行ふ。勞働會といふものがあつて、生徒が園藝養鶏をやれば、生徒用の文房具を生徒が賣り、斬髮器械を學校で買入れては、生徒が互に頭髮の刈り合をする。若し夫れ寄宿舎に至つては、食事の獻立から、買出から、煮炊から、給仕に至る迄、盡く生徒が順番に之を勤めるのである。舎内の掃

除はいふに及ばず、生徒の入るべき風呂は、生徒で立てる。自分の事を自分でするに何の不思議と、誰一人苦情を言ふ者はない。

此の又寄宿舎なるものが、頗る面白い。此の寄宿舎には門限がない。出入一に生徒の勝手にしてあるが、幸ひにして未だ夜遊びをして、遅く歸る者もないさうな。随つて、此處には罰則といふものもない。偶心得違ひの者があれば、同室の上級生が一應説諭して、夫れで聞かぬと、舎監が説諭するきり。禁足の減食のといふ野蠻なことは、一切せぬ。寄宿舎には、名許りの表門裏門があるが、太やかな棒が、によつきと二本立つたゞけで、一枚の扉もない。山は動かす、唯白雲の去來に任す底、奥ゆかしいな。

んといふばかりでない。

折ふし、父兄が遙々と生徒に會ひに来る。世間の學校では、最愛の父子兄弟偶相會しても、父兄は寄宿舎に入れず、生徒は門限に縛られて、緩くり父兄の宿を尋ねる譯に行かぬが、此處の寄宿舎では、父兄が寄宿舎に出入することは勿論、生徒と同室に寢泊りして、食事も食堂で一緒にすることが出来る。だから父兄は學校に来るのを、何よりの楽しみとしてゐる。毎年紀元節、天長節といふやうな日には、教員生徒打交つて、大祝祭を擧げる。餘興には、生徒の手工品狂言もあれば、教師も子供の様になつて能仕舞などをやる。其の日の御馳走にとて、生徒が自分の作つた芋を掘つてくれれば、教員の細君達が、總出で薩摩汁を作る。

といふ騒ぎ。之を見んとて、近郷近在の民が押し掛る、父兄は前
晩から泊り込で来る、和氣霽々、全校一家の如くといひたいが、
全校どころか殆ど全村一家の形だから、生徒中に病人が出来
て病室にでも入ると生徒が代る／＼看護婦も及ばぬ介抱を
する。閑を見て見舞に来る者は、殆ど朝から晩まで絶間がない。
いちらしくて涙が溢れる様ださうだ。

僕はがばと起きて、柳楊枝の儘、薄暗い廊下を食堂の方へ出
かけた。生徒は早や起き出て、面白さうに竈の下を焚いてるの
もある、水を汲んでるのもある。井戸端には、三四人で、せつせと
米をといでゐたが、其の中の新入生と覺しい十三四の生徒が
桶を傾げながら年上の上級生を見上げて、『もう之でえゝか

ア』と問ふ。上級生は側へ寄つて、一寸水を掬つて見て、『白い水
になれへにやもう宜え。』其の睡じげなこと、丸で兄弟のやう
だ。問答終つて後、上級生はふと僕を見つけて、急ぎ手水の水を
汲んで呉れた。僕迄が家内扱ひである。

折しも、けたましく鶏が鳴く。之も生徒の飼つてゐるのだと
思ふと、他人のやうな氣はせぬ。

下

そよ／＼と吹く春の朝風の心地よさに、僕は飄然と學校の
庭へ出た。月は早や沈んで、空は東から白みかゝる。生徒の植ゑ
た桃や櫻が、今を盛りと咲き亂れてゐる。行くとはなしに寄宿
舎の後へ出ると、此處は一帶の姿をかしい磯馴松の松林で、其

の末がすつと砂白き廣灣の浪打際につづく。學校の庭に海を抱き込んで、休憩時間に海水浴も出来れば、舟も漕げるといふは、愉快極まる。僕は此處迄来て、ぐつたりと松の根方に腰を下した。右には建て列ねた學校の建物、左には灣を隔て、打連なる湯淺栖原の山々を見ながら、何とも言へぬ感がした。

初め僕は此の學校の長たるべく、濱口家から薦められた。薦められはしたが、僕は何う最眞目に見ても、教育家として立つべき柄でない。兎つ措いつ思案に餘つてゐる所へ、折よく友人が一人、歐羅巴から歸つて來た。彼は僕と鎌倉の野狐仲間で、後に僕が京都の本願寺の學校に、惡舎監の譽を博した頃、彼れは同じ京都の妙心寺の學林に、教鞭を取つて、令名頗る高かつた。

其の後分れて三五年、彼れは初め米國のエール大學に學び、更に歐洲各國を歴遊して、今しも歸り來つたのである。會つて談を聞けば、彼れは學校を一つ興したいのだといふ。夫なら、寧ろ耐久舎を引受けて呉れぬかと僕がいふ。兎角の押問答の末、到頭無理往生に引受けさせて了つたのが、即ち今の校長寶山良雄君である。斯くて彼れが就任以來の勵精刻苦は非常なもので、其の結果、當年の耐久舎が耐久中學となり、薄汚い村外れの小校舎が、此の濱邊に移されて、巍然たる大校舎となり、耐久中學の名が、教育社會に喧傳せられて、遂に文部大臣をして、最も其の理想に近き學校と迄激賞せしむるに至つた。昔者スタンフナード夫人がスタンフナード大學を建て、スペンサーに其

の總長たらんことを求めた時、スペインサーは我れ其の任に非ずと言つて、今のジョルダン博士を薦めたといふ有名な談がある。僕はスペインサーでないが、寶山は慥かにジョルダンであつた。

寶山といふは不思議の男だ。彼れは長い間歐米諸國に遊んだが、一向ハイカラぶつた所はない。圓覺妙心邊で、隨分鍛へた體だが、左りとて一向抹香臭くない。謹嚴な學校長といへば、四角四面の融通の利かぬ人のやうに思へるが、彼れは謠曲もやる、仕舞もやる、時には自ら脚本を作つて、學校の記念會などで、自ら芝居に加はることもある。校長が斯んな風だから、風を臨んで、耐久中學には、隨分風變りの人が集つてゐる。舎監の佐々

木定信君の如きは生徒と年が年中起臥寢食を共にして、宅へは一週に一度しか歸らぬ。耐久中學の寄宿舎に一異彩を放たしめたのは、一に此の人の力と迄賞せられてゐる。博物科の教員某君の如きは、資産家の息子で、斯な片田舎の學校に勤めななくても宜いのを、自ら求めて、薄給で平氣で働いてゐる。生理學の教授に人體模型が必要だが、學校に差當り金がないといふと、先生三四百圓の私費を投じて買つて來た。其の外の教員中、金に買はれて來たやうなのは、唯の一人もないとのことだ。

此に於てか、學校の所在こそ有田郡の片田舎なれ。來り學ぶ者の中には、北で秋田、長野、山梨、石川、東京、南で長崎、熊本。さては韓國から來てる者もある。此の又模様を見んとて、來り訪ふ者

の絶間ない中に、舊藩主もある、文部大臣もある、前圓覺管長もある、ラッド博士夫妻もあつた。遠からず徳川家達公も見える筈だといふ。

嗚呼僕が来てゐたら、今頃何うなつてゐたらうか。不祥な話だが、或は潰れてゐたかも知れぬ、——と思ふと悚然とする。倚仰感慨に堪へぬ間に鈴が鳴つて、食堂が開けたとの報せだ。幾百の生徒と一緒に、粥に香の物の質素な食事を、山海の珍味と許り、舌鼓打つた後、僕も生徒と一緒に茶碗と箸とを洗つて、又舎監室に歸つた。今度は又鈴が鳴つて自修時間となると、寄宿舎内は人聲全く絶えて、左ながら無人の境の如く、肅然として靜り返る。僕が某學校の舎監を勤めた時、自修沈黙の時間

には、見まはり通しに見まはつて、猶且笑聲談聲を絶つことは出来なかつたが、此處の舎監殿は見まはらんともせず、平氣で僕等と舎監室で話をしてゐる。太平なものだ。

やがて又鈴が鳴る。自修終つて朝會の始まりとある。朝會とは授業時間前二十分間全校の教員生徒盡く大講堂に集つて、一同校歌を奏した後、教員が順番に訓諭をするのださうだ。今日の朝會には僕が訓諭をする筈だといふので、僕は俄に大眞面目になつて、二十七度八分の一位の角度に身を外らして、講堂の中へしやくくり出る。

五 安珍清姫が址

安珍清姫の戀物語で聞えた日高川や道成寺に程近い、日高の御坊に着いた。元來僕は安珍も好きだが、清姫も好きだ。擧世滔々、男は金で女を弄んで得意がり、女は出た所勝負に、其の操を賣つて恥とせぬ今日の世の中から見ると、安珍が其の主義に反くとて、さしも熱心に言ひ寄つた清姫を捨て、逃げたのもえらいが、清姫が一旦斯うと思ひ詰めたが最期、蛇に化けてまで男の後を追つかけたのもえらい。僕は美人を弊履のごとく棄てた安珍を高しとすると同時に、此の人ならではと思ふ男の無情を怨んで、これを焼き殺した清姫の意氣をも壯とせざるを得ぬ。僕が若し安珍なら必ず逃げる。又若し清姫だったら、僕は必ず追掛けたに相違ない——誰だ、後の方で變な咳拂

ひをするのは、

牟婁の田邊から中邊地街道を五里許り入つた栗栖川に、今も尙眞砂の庄司が館の址といふのがある。之が即ち清姫の父庄司が家の在つた處で、此處から道成寺迄大約十五六里の間を、安珍先づ奔り、清姫次で走つたのである。マラソン競走なら、安珍の方に大分ハンデキャップのついた譯だ。十五里として、凡そ三十六七哩。清姫は朝から驅出して、日高川の邊で日が暮れたとあるから、何でも一時間三哩位の速力で走つたものらしい。之が今なら、差詰め、翌日の新聞には、二號標題の寫真入の記事となつて、各社から特派員が此の御坊邊迄續々押掛けて來る所である。

清姫は今の栗栖川村大字北郡の家から出て、先づ潮見峠の嶮を越えた。峠の上に今尙袖掛松といふがある。振袖姿の競走でもあるまいと云ふので、彼は兩袖を引きちぎつて、此處へ掛けたのだと云ふ。峠から先は三栖谷に下つて、今の萬呂村を経て、漸く田邊へ着いた。田邊では熊野街道を北新町へ入つて、長町通（今の榮町）をひた走りに走つたが、今の松崎朝日新聞販賣店の隣に、其の頃あつた山源といふ旅館の前へ出た時は、血相全く變つて、既に腋の下邊に鱗が三枚ほど生えてゐたとのことだ。是は四五日経つて、道成寺の騒ぎが此の邊迄知れ渡つた時、さへは彼の時脛も露はに血眼で走つた女こそ清姫で、さういへば、鱗が二三枚あつたやうだなど、近所の人が語り合つたも

のと見える。袖が千切れてゐたから、腋の下とは能くお氣がつかれた。斯くて後、清姫は榮町通を西へ、本町通八百長店の前を右へ、眞直に會津橋に出で——杯と書くと、何やら葬式の道筋でも書くやうだが、此の會津橋を渡つた先に、龍泉寺といふのがあつて、一説に、清姫が此處の井戸で水を飲んだから、龍泉寺と名けたともいふ。

田邊から南部街道にさしかゝる處に、蘇生山と唱ふる坂がある。清姫此處で息を切らして、人事不省に陥つたのを、通り掛りの醫者が人工呼吸法を行つて、アンモニアを嗅がせたので、息吹き返したといふので、斯く名けた。之より走ること約六里にして、印南に出た。例の旅僧に安珍のことを尋ねたと、淨瑠璃

にあるのは此處のことだ。印南から日高川へ出る迄に、野島村といふがあつて、此處の海岸に海に面して「清姫之塚」と書いた自然石の墓がある。俗に草鞋塚と唱へて、清姫が此處で草鞋を脱ぎ棄てたとしてある。——と聞いて其の時を思ひやると、清姫は此の時既に兩袖なしの甚兵衛みたいな衣物を着て、髪は亂れ、裾はまくれ、而して足袋、跣足となつてゐたのである。斯な異形の風體の者の走つて行くのを知つて、巡査が止めなかつたとは怪しからぬ。日高郡警察署たるもの、如何ぞ曠職の責を免るゝを得んや、と言ひたくなる。

日が暮れて、日高川の南岸鹽屋の里に着いた。川水に映つた自分の異形の姿を見て、よゝゝと芝居で驚くのは此處だ。川

岸に衣掛柳といふがある。之へ例の甚兵衛を脱ぎかけて、洵然と水に飛込んだ。此處ではもう蛇に化けてゐる。蛇に化けてから先は話が早い。彼は此の御坊町を左に見て、小松原村通藤井村に出で、大字鐘巻の道成寺に着いて、安珍の隠れた釣鐘を七卷半巻いて、之を焼き殺した上、寺の前の海中へ身を投じて死んだ。其の海が今島になつて、今此處に蛇塚といふ小さい石碑が建つてゐる。

村松柳江兄の説に據ると、清姫の蛇に化けたといふのは、嫉妬の餘り、安珍の隠れた釣鐘堂を繩で縛つて火を放つたのだらうとのことだが、夫にしても、十五六里すたすたと追懸けて来た熱心はえらいものだ。僕も一生に一度、斯な奴に追掛けら

れて見たい。走りッくらなら負けるもんでない。

六 南部の鹿島

上

『早う出て行きまッてへんか。中村はんが下でお待ちまッてへんす』と女中が催促に來た。『べらぼうなことを言ふな。乃公はまだ飯も食ひまッてへんぞ。中村に今少し待ちまッてへろと言へ』と僕は怒鳴つた。『待ちまッてへろ』とは我ながら旨く出來たものだ。抑も此の下で待ちまッてへる所の中村なる者は、僕と法律學校の同窓で、今は紀州の代議士だ。昨夜日高の報告演説をすませた後、十二時過に僕を西牟婁の田邊の宿迄追つ

かけて來て、是非一つ南部の鹿島に遊びに行かうではないかといふ。其處で、今朝急に小舟を仕立て、愈之から漕ぎ出しまッてへんとする所である。

長閑な春の朝日の光を浴びて、潮ゆたかな海面を漕ぎ行くこと二里、鹿島が追々に近づいて來た。鹿島は日高郡南部灣内の、周圍十八町、廣さ六町許りの小島で、南部から一里ばかりの海上に在る。島は東西二峰に分れて、共に鬱乎たる森に覆はれてある。東の峰には石階幾十級を登つて、上に小やかな鹿島の社がある。神々しい木下蔭に、名も知れぬ鳥が亂れ轉つて、見る目遙けき太平洋の青海原が木の間を洩れて見える。西の峰には自然石に刳つた石段を拾つて、或は坂を登り、或は谷に下る

と、其の末濶と開けた荒磯に出る。突兀たる怪巖奇石轟然と列び立つて、之に打ちつくる千波萬波玉と碎け、花と散る。日麗かなる時は、濱邊に打群れて、貝を拾ひ磯菜を摘むべく、風靜かなる時は、或は巖に踞し、或は船を行つて釣を垂る。グレ、ガシラ、ウツボ、イサキなど綸に随つて針にかゝる。景色は佳し、山は靜かなり、南部邊の人が此處を無二の樂地としたのも無理ではない。古くから世に聞えたものと見えて、太寶元年持統天皇の熊野に行幸せられた時、供奉の人の詠んだ歌に、「三名部の浦潮な満ちそね鹿島なる釣する海人を見て歸り來ん」といふのが萬葉に在る。之で見ると、其の頃鹿島は潮の干た時、南部から徒涉の出來たものらしい。

が併し、景色が佳くて釣の出來る位の小島なら、世の中に幾許でもある。夫ほどのものに中村代議士僕を誘ひもせねば、僕とても出て來る氣は毛頭ない。夫が何で態々見に出て來たかといふと、此の島に、外では見られぬものがあるからだ。鹿島は海上の一無人島に過ぎぬが、其の中に公園がある。無料宿泊所がある、俱樂部がある、征露記念道路がある！

斯の如き不思議の設備を立てた島の恩人は、其の名を長岡佐介といふ。元は南部の生れで、今は横濱の豪商である。鹿島はもと官有地で有つたのを、佐介老人殆ど全部私費で之が拂下を受けて、南部町の共有地としたが、其の後も老人自ら私費で道を拓き、橋を架し、地を均らし、家を作つて、以て縦まゝに近郷

近在の民の來り遊ぶに任せてある。南部から五錢の渡賃で、何人でも渡して呉れる小舟を用意し、島には茶呑所やら、休憩所やらを至る所に建て、夜具と食料とさへ用意して行けば、何人が何日泊つて遊んでも構はぬことになつてゐる。月明かな夕にも、風涼しき夏の朝にも、釣竿片手に來る男もあれば、割籠擔ひ持つて遊びに來る童もある。斯うして遊びに來る人がある。と、老人左ながら自宅へ客の來たやうに喜んで、自分の居合せた時は、自ら之が爲に薪を樵り、茶を煮て侑め、さては來る人毎に戊申詔書や東照公遺訓を刷つた施本を配る。釣でもしやうと思へば、釣道具迄貸して呉れる。

併し老人は始終此處に居る譯でない。彼は横濱で盛んに買

易業を營んで、僅に暇を得た時だけ、飄然として此處に來て隠れる。夫も大方は南部に宿を取つて、晝間だけ遊びに來るに過ぎぬ。其の外は全島明ツ放しの來る者は拒まず、去る者は追はず、遊ぶ人の意に任せて、御勝手にお使いひめされと計り打棄ててある。世の物持が小さな別荘に立籠つて、高々と周らした城壁の中に、我獨り面白がつてゐるのは、雲泥の差だ。

兎角する中に、船は島の南岸、東山西山の間、小砂利美しい濱に着いた。どれ、下りまッてへうか。

下

聞として人聲全く絶えて、如何さま無人島らしい。先づ東の峰なる鹿島の社に詣でた後、更に西の峰を攀ぢた。

征露記念道路として、參差たる荆棘を拓いて、岩を抉り、森を潜つて、一條の道が通じてゐる。兎ある小山一つ越えて、其の背へ出ると、新しい家が二三軒列んで、其の彼方は開關の昔何とかの命といふのが、赫と怒つて萬斤の鐵槌で叩き割つたとてもいふやうに裂け千切れた岩山が、幾つか列んで、之に波が鞞鞞と打ちつけて居る。波の打ちつくる毎に、岩山の上に立つた磯馴松が打揺ぐやうな壯觀とも何とも言ひやうがない。

手近の方の家は、茶呑所として、長岡老人の建てたもので、其の前に彌平兵衛宗清建つる所の敦盛の墓といふ石碑がある。昔から敦盛の墓の此處に在ることは言ひ傳へられてゐたが、去る三十九年、鹿島の社の側から掘出して、此處へ移したのだと

いふ。一の谷の中に名もなき墓が何とやらして、此の彌陀六が涙の跡とか何とかあるのは之だと、中村代議士がいふ。先生文句を言つたが、僕は今忘れた。

茶呑所の裏に、茶呑所の定といふ揭示がある。曰く

一、當山に御參詣の御方々は、此の家にて御隨意に煮炊して緩々お遊びなされ。

二、難船にて御迷惑なさる御方は、此の家にて寢泊なされてよろし。

三、此の家を漁者の仕事場となし難く候。其の外錢儲けの爲使ふこと御斷り。

一、此の家には、左の備附品あり、

鍋、釜、火鉢、茶瓶、茶碗、煙草盆、マツチ、箒、硯箱、其の他食器。

一、出立の節には掃除して、戸締火の用心たのみます。

中に入ると、八疊と六疊との小ざッぱりした座敷と、別に茶の間と物置があつて、此處に「賭博と喧嘩口論無用」と張り出してある。僕等は此處へ腰を下して、見飽かぬ絶景を賞してゐたが、此の邊には三四人の土方が、頻に土を運び、石を割つて道を拓き、地を均してゐる。其の土方の中に交つて、年の頃六十五六の、でッぷりと太つた半白の八字髭の大男が、小紋紬の綿入に、紀州ネルのシャツ、紀州ネルの襟巻、紀州ネルの股引を着けて、烏打帽尻端折の姿で立働いてゐたが、僕等の姿を見て、急に走せ寄つて、『お茶は直ぐ沸きますが、御飯の用意がなくば炊いて

進せやうか』と言つて來た。名乗り合つて見ると、別人でもない、此の人が即ち長岡佐介君であつた。昨今少し商賣が暇なので、例に依つて南部へ遊びに來てゐるのだといふ。

其處へ南部の有志家が四五人、僕等の爲に釣道具やら、酒やら、御馳走やらを仕入れてやつて來た。さらばと許り、又舟を漕ぎ出して釣に出ると、島の周圍は到る所好漁場。綸を下す毎にガシラ、ウツボが續々喰ひつくや、一時間も釣つた後、立歸れば、茶も飯も酒の爛も出來てゐる。今しも釣つた魚は直に料理して味噌汁に作らした。今度は三笠山と唱ふる巨巖の正面、碧潭に臨んだ見晴しの好い中二階の鹿島クラブといふのに、席を移して酌み始める。此の俱樂部は、濠洲在留の人北村寅之助

といふ人が、長岡氏の特志に倣つて建てたのださうな。山中の名所には、此の外にも追々に斯な家が建ちかゝる。此の上の辰の峰には長岡氏の三疊菴の建築中、扇の芝には、北村君の贈つた沖見堂北見堂がある。

酒三行會話が盛に起る。此處の茶呑所の備附品は、誰一人番人をつけて置かぬが、未だ曾て盗まれたことがないといふ。來る人もく、歸る時はちやんと掃除をして行くといふ。醬油酒の類を此處へ置いて行く人がある。之を使つた人は、其の次來る時、大抵元の通りに返して置くといふ。さうかと思ふと、田邊あたりから藝妓を連れて來て、其處等へ落書して困る奴があるといふ。夫から話頭がすつと海の方へ飛んで、此の島から八

町許りの沖にワクといふ所があつて、其の海底から温泉がぼくぼくと出てゐる。彼奴を盥で伏せて、盥の底から鐵管で此處へ引いたら何だらうかとの議論も出て大笑ひとなつた。始終嬉しげに黙聽してゐた長岡老人は、斯う大勢賑かに寄つて、誠に嬉しいといふ。

日が暮れかゝる。中村君は有志と共に御坊の報告會へ、僕は田邊の宿へと立ち分れた。

七 九里峽を下る

雨を冒して瀨八丁の奇勝を探つた後、宮井まで引返したの
は彼此午後の五時、此處は本宮から來る熊野川と瀨の下流北

山川と相合する處で、一には之を出合ともいふ、之から下が即ち九里峽である、日は暮れかゝる、雨は益々盛に降つてくる、船頭は蓑笠に身を固めて、絶えず阿伽を掬つてゐる、自分は苦の下に小さくなつて、消えかゝつた火鉢を抱へてゐるが、折節横さまに風が吹き込むと、苦の下で傘を廣げて、頭からすつぽりと毛布を被るより外に策がない、今朝十時頃に小さな辨當を舟の中で喰つたきり、腹は空る、寒くはある、時々船頭がぼやきくさる、いやもう、とんと何のおのれが櫻かなだ。

懸崖屏風の如き兩岸の間に、清澄氷に似たる水を湛へて、見上ぐれば躑躅石楠花緑樹の間を彩どり、見下せば碧潭瑠璃と澄んで、小動ぎだもせぬ瀟峽の景は、成程天下の奇勝には相違

ないが、態々宮井から四里半引舟で、やつこらせと上つて、さて僅に八丁の間に舟を上下させて、夫でお仕舞とは、如何にしてもあつけない、之から上瀟までは更に二十餘丁あつて、其處も矢張り八丁ほどの勝地と聞いて、行手を急ぐ僕は、直に舟を返させた、瑞西伊太利の山水は、山水許りで人を呼ばぬ、函根の宮の下が、あんなつまらぬ處でありながら、さしも世界中に聞え渡つた所以のものは、富士屋ホテルあるが爲である、だから、何のおのれが櫻かなだ。

舟は片時も休まず、雨を衝いて、九里八丁を下り始める、河が熊野川と合して、所謂新宮川となつてから、俄に水の色がさゝ濁りになつて來た、船頭に聞けば、昔は澄み切つた水であつた

が、去る二十二年の洪水に濁り出してから、今に斯くの通りといふ。二十年前に濁つたまゝで澄まぬといへば、此の後澄み切る迄には、まだ何十年かゝるか知れぬ。澄む澄まぬと言つてゐる中に時代が移つて行く。「沅湘日夜東に向つて流れ去る。愁人の爲に止ること少時もせず。」——愈以て何のおのれが櫻かなだ。

下り行く奔湍激流に、舟は右に曲り、左に折れながら、一瀉千里と走り行く。兩岸の山々煙雨を帯びて、模糊たる中に、瑠璃が頻に囀づる。時々林の間から哨々と雉子が啼く。又遠くでひゅらひゅらと溪蛙が鳴交はす。川幅濶と開けて湖とばかり水の淀むと見る間に、兩山相逼つて道あはや此に窮しぬと狭まる。

山角屹と川中に突き出でたるを、すりと周れば、呀然として巨巖の大口を開いて、わが行く舟を一呑と、水の彎入した處へ出る。水馴竿の一突一突毎に、四邊の風光は倏忽に幾變化して左ながら目まぐるしい許り行くこと一時許りにして、鞆鞆の聲天地を震撼し、飛瀑一條颯と右岸に落ち下る。鶯の瀧といふ。此の瀧から下は大小の瀑布、其の數を知らぬ。瑞西の山中には何千尺といふ高さの禿山から、絲の如き瀧が幾十條となく、うねり下るを見たが、此處のは鬱乎たる緑樹の間に落つるとして、或は其の頭を露はし、或は其の尾を露はし、中には落ちかゝる處も、下り落つる處も、森に隠れて、僅に其の腹ばかりを、雲を掠めた銀蛇とばかり見せたのもある。様々の瀧の、様々の形に

落つる趣の面白きが中に、大なるは右岸に布引の瀧、葵の瀧、見上ぐる絶壁より白雲の搖曳するが如く落ち、左岸に雪の瀧、白雪の積んでは落ち積んでは落つるに似たのがある。葵の瀧は那智四十八瀧の一といふ。僕は刻々に變り行く景色に見惚れて雨も構はず、我知らず苦の外に出で立つた。いや、おのれは大分櫻らしいぞ。

雨は益降りしきる。舟は帆を上げて矢の如く走り下る。瀨に乗れば水聲潺湲、舟發矢と過ぐ。淵に入れば、山樹影を倒しまに映して、舟は木の間を滑り行く。暮色蒼茫、西より來つて、今更らしく元氣づいた船頭の歌ふ聲、風に吹きちぎられて、左ながら水を打つて飛ぶやうな、愈おのれは櫻だ。

瀬原といふのから、河水俄に開けて、間もなく、新宮の燈臺がきら／＼と見え初めた。日が全く暮れて後、新宮の宿へ着くと、十七八年相會はなかつた僕と中學の同窓の友達二人が、いそと迎へて、實は先刻から雨の中に立つて、二時間も河原で待つてゐたのだといふ。其處へ松尾朝日新聞販賣店の大將が來る。三人して先づ衣物も着かへよ、湯にも入れ、晚餐は何處やらで一緒に食はう、明日は何處やらで講演をやつて貰つて、夜は何とか樓で歡迎會を開く手筈にしてあると、それは／＼行届いた世話。

此に於ておのれは全く櫻ぢや。

八 熊野川の筏

新宮の製板所の裏に出た。大小の角材平板を積んだ間に木片鋸屑が一面にちらかつて、工場には焦々と蟬の鳴くやうに鋸の音が聞える。兎ある土堤を一つ上れば、前は目も遙に打開けた貯木場——此處に何萬本とも知れぬ材木がぎッしりと水の面に浮んでゐる。

水に浮んだ所だけ見ると、材木が山から自然に水の中に滑り落ちて、何時しか此の新宮の河口迄流れ寄つたやうな氣もするが、何しろ一本大道に轉つてゐてさへ始末に悪い奴を、何萬何千と一つ處に集めて來るのは、普通大抵の世話でない。先

づ某の山で若干の立樹を切倒したとする。枝葉を拂つて丸太のまゝで送り出すのもあるが、大抵は更に四周をはつツて何尺角といふ角材に作る。材木となつてから、杉檜なら一箇月、其の他の黒木なら四箇月の間、其處等へ轉したまゝ、乾して置いて、乾きが一應入つたと見た所で、初めて愈山出しにかゝるのである。

都合よく切出した場所が谷近くなら、其のまゝ滑り落されもするが、生憎と谷迄出るに勾配が緩いとか、高低があるとかいふと、已むを得ず、其の切り出した木を其の儘利用して、スラを作る。スラとは木を二本縦に列べて道を作り、其の上へ材木を載せて滑らせる仕組で、滑らせる材木が盡きると、スラに使

つた木を後から順々に取つて次のスラへ滑らせ、次から次と次第に切倒したけの材木を運び去るのである。小溝に會へばスラで橋を作り、冬ならば水をスラに撒いて氷らせた上で、滑りよくすることもある。

ヤツと山の中の小谷へ材木を落し終つた所で、さて小谷のことゝて木を流すほどの水がないとなると、柴や苔を集めて此の小谷を堰き止めて、水の溜る迄待つのである。水が溜つて堰とすれぐの高さになれば、木は堰を溢れ出る水に流されて、一本づゝ其の上を越えて行く。越えた所で其の前途にも水が乏しければ、幾度でも斯んな堰を繰返さねばならぬ。所が初手から全く小谷に水がないとなると、其處等の雜木を切り集

めてサデを作り、スラと同じ仕組で其の上を滑らせるか、さては木馬道を作つて、木馬に材木を載せて引きずる。木馬道とは木で作つた軌道で、木馬とは其の上を滑る櫓だ。

斯くして漸く大川へ出ると、取り敢ず、一本づゝバラの儘で川へ流す。之を川狩とも管流しともいふさうな。さて川を流して幾里か行つた後、綱場といふに着く。綱場とは一に土場とも言つて、此處で初めて筏に組むのである。綱場には川を横つて鐵線を架け渡して、上から流れてくる材木を受留め、留めた材木を河原の廣場へ三組に組上げる。此の組上げたのを臺取といふ。材木には夫々持主の焼印があるから、綱場で止つた木に、他人のがあれば、其の儘下へ流して、次の綱場へ送りやる。

臺取に組み上げた木は、更に一本づゝ川へ落とし込んだ上、尺締二間の材木四本を標準として一カモに組む。カモに組むには、近頃猫環と唱ふる鐵釘を二本に跨いで打ち込み、別にタマゴといふ藤の蔓で縛る。昔は大抵木材にメガと稱する穴を明けて、之に子チ木を通したものだ。斯くては材木に大きな穴が明いて、寸が縮まるとして今は餘り用ひぬといふ。

カモが出来た。カモを通常十四箇繋いで、此に初めて一筏が成るのである。一カモとは、言はゞ一輛の車で、筏とは列車みたいなものだ。筏には角材なら八十本以上、丸太なら三十五本以上ついてある。筏の流るゝ途中ぐらくせぬやうにと、カモ毎に二本づゝ棧木を入れ、別に筏の舵を取る爲にと、第一番

のカモの後部に舵が一つある。乗手は通常二人で、前部ではカモにつけた艫楫を押し、後部の者は竿を取る。而して悠々と水に任せて、此の熊野川を流れ下るのである。折節水の少い處では鐵砲堰と唱ふる閘門のついた堰を作つてある。此の門を閉ぢて水を湛へた後、颯と門を開けば、筏は瀧の如く閘門より落ち下る水に浮んで、すらくと流れ行く。見た所は壯快だが、乗る者に取つては、雨露に曝されて、足は始終水浸り。僅に舵の取柄の端に縛つた辨當を立ちながら食つて、日がな一日水と睚めくらでは餘り面白いものであるまい。静峽も九里峽も、其の眼中にあるものでない。

大和の十津川から柵の尺締一本一丈五尺五寸のものを、此

處迄持つて來るとして、收支初めて相償ふ最少の數量一萬三千本の平均を取つて見ると、山では一本四十錢に當つたものが、杣賃、運賃、筏の組賃、問屋の保護賃、縣稅、堰代之に非常の費用、使用人の給料及び金利を見積つて、丁度二圓九十錢になるといふ。道程凡そ二十六七里、切り出してから此處へ着く迄の日數約六七箇月とある。

見渡せば、ごろ／＼と轉つた此の材木も、今日假寢の夢を此處に結んで、明日は製板所で切らるゝか、大阪、名古屋へ賣り飛ばされるか知れぬ。

九 勝浦海中の井戸

那智の瀑布を觀てから、直ぐ車を勝浦に飛ばせた。丁度時分といふので、僕は新宮から態々見送りに來て呉れた友人と、此處で午餐をした。ゝめることにした。外面を見ると、小さくはあゝるが、水深く灣深き勝浦の港。成程熊野九十九浦中での勝浦と名に呼ぶだけあつて、良い港だ。臺灣行の汽船といふ千噸許りののが二艘繋つて、盛に煙を揚げてゐるなどは、紀州中を歩き廻つて、未だ曾て見なかつた所と、頗る意を強うした。港も良いが、景色も佳い。灣を圍んだ四山の趣に捨て難い所がある上に、西の方には湯川の越の湯、東には外の湯、赤島の湯などいふ温泉が湧き、灣の中には中島、鶴島など姿をかしい小島がある。——此の又中島の北に當つて、丁度天満川の落口から少し西に寄

つた海中に不思議なものが一つある。

僕は此の文の最初に「那智の瀑布を觀てから」と斷つて置いたが、元來那智には那智四十八瀧と唱へて大小様々の瀧がある。之を盡く見て回るには、何うしても三日はかゝるといふ。其中、日本第一と稱せられた所謂那智の瀧なるものは、此の邊で一の瀧と唱ふる、一番大きい奴のことで、僕等の觀に行つたのも矢張夫れである。所で此の瀧直下八十丈懸崖に白布を垂れたやうに落ち下る様、頗る物凄く、鞞鞞の聲山谷の間に震えて、如何にも文覺荒行の昔を思ひ出させるが、さて其の瀧の下流に當る天満川なるものは、見る影もない小さなちよろ／＼流れで、之を日光の大谷川などに比べると、如何にしても日本

第一の瀧を受けたものとは見られぬ。此に於て、此の邊の傳説には那智の瀧壺なるものが、底も知らぬ奈落に抜けて、僅に其の餘り水だけ天満川に落ちるのだと言つてゐる。そんなら其の奈落の底に抜けた水は何なるか、と曰ふと、之は二里餘の地下を潜り海底を潜つて、其の末遂に勝浦灣の海中に出るのだといふ。——不思議といふは之だ。

如何にも勝浦灣内に水が出る。清水が出る。滾々として晝夜を釋てず、沸々と出てゐる。元は陸地を距る數百間の沖に在つたが、近頃海岸を埋立てたので、今は埋立地から三四十間の先にある。何分海中のこととて、沸き出ると共に、潮水に交つて了つたのを今から十四五年前、岸庄次郎といふ篤志家が、私費で其

の四圍に井戸側を作つて、海水の混入を防いだので、飲料水の乏しい勝浦では、皆之を汲みに出る。捕鯨船定期船などは、態々陸上迄行かずに、此の水を汲み取つて、間に合せるので、井戸は小さいものだが、此の小さな井戸が、勝浦港の繁榮の一因となつてゐる。何でも捕鯨船などは一噸四十錢とかで之を買ひ取つて行くのださうだ。

午餐終つて後、海に向いた欄干に凭れながら、僕は不圖十八年前の昔を憶ひ出した。其の時候は丁度二十で、和歌山の新聞に居たが、或る日此の勝浦の漁船二百餘艘が三十里の沖合で細魚漁をやつてる最中に、大暴風に遭つて、漁民五百餘名を乗せた儘、行方全く不明となつて了つた。正に是れ縣下の一大事

變である。所が縣の當局者がうかとして、斯んな時に軍艦の派遣救助を求むべきものといふことに氣がつかず、愚圖々々と埒の明かぬ評定許りしてゐる中に、彼此一ヶ月も経つた後、行方不明であつた漁民の大多數三百餘名は、黒潮に流されて八丈島に漂着したとかで、其處からひよつくりと歸つて來た。若し縣當局が今少し早く手續をして居たらば、五百人が五百人盡く助かつてゐたかも知れぬ。さアやれ縣廳征伐此の時に在りと、僕等は血氣に任せて、散々の攻撃を時の知事代理であつた書記官某の頭上に加へた。然るに此の喧嘩次第に花が咲いて、遂に書記官は轉任となり、僕も到頭和歌山に居られなくなつたのである。嗚呼思へば十八年は夢と過ぎた。今此處へ來て

見るとあの書記官は今頃何うして御座ることやらと、懷舊の情に堪へぬ。

車の用意が出来たといふので、僕は悄然と此のなつかしい勝浦を立つた。

十 串本の稲村亭

串本の神田家には、亞米利加から流れて来た家がある。名けて稲村亭といふとのことだ。夫れ面白いと、僕は神田清右衛門君を案内に煩はして見に出かけた。神田家は紀州屈指の豪家で、串本に数多い一家一門の神田姓の中で、此の清右衛門君の家が其の總本家である。清右衛門君年配六十左右で、ツぷりと

太つた赤ら顔の人で、一寸見ると極めて無愛想ながら、何かして莞爾と笑ふと、顔中一面に無限の愛嬌を湛へる所、何處やらにプライアンの保がある。先生中々の企業家で、嘗て神田汽船會社を起して、大阪商船會社に對抗したこともあつたが、今は紀伊水産會社を經營して、盛に捕鯨事業をやつてゐる。牧朴眞氏一派の捕鯨會社の合同論には、清右衛門老人大の反對で、何でも大會社は費用許り嵩んで到底小會社の小心翼翼事に従ふとは、同日の談でないとの論だ。

頓て稲村亭へ着いた。亭は新宅と唱へて、先代の隱居所に充てゝゐた家の奥座敷にしつらへた八疊と十疊の二室である。——此處で清右衛門君から、稲村亭棟木の由來と言つたやう

な講釋が始まる。

今から凡そ四十年ほど前、串本から程遠からぬ有田村の稲村の海岸の岩上に、途方もない大きな材木が、一本大波に寄せられて打上つた。折ふし通り掛りの漁師何がしといふのが、目早く見つけて拾ひ取つたが、長さ二間の切口一間もある大木。轉した端に人が立つと、丁度頭と木がすれ／＼になつたと言ふ。四方は一面に蟲に蝕はれ、水にさらけて、切口などは丸くささくれて了つてゐる。何十年海の中に浸つてゐたものとも見當がつかぬ位であつた。

拾ひ上げた後諸方から大分買手がついた所で、其の時から二十年程前、稲村に大饑饉のあつた折、神田家が其の倉庫を開いて盛に救恤を行つたことがある。漁師は之を徳として、せめては斯る折にこそ、其の恩誼の萬一に報いんものと、一切の買手を盡く斥けて、此の珍らしい大材木を惜氣もなく無代で神田家へ贈つた。神田家が饑饉を救つた心掛もゆかしいが、之を覚えてゐて、其の日暮しの貧しい漁師が、怨を離れて之に報いんとした心掛は、尙以てゆかしい。惜むらくは其の名を聞き渡した。

神田家では、折角の好意と喜んで此の贈物を納めたが、此の邊には斯んな大きな木を挽くべき大鋸もなければ、木挽も居ない。俄かに人を大阪に走らせて、急に別仕立の鋸を拵へさせるやら、仕事に慣れた木挽を雇ひ集めるやら、やつさもつさ大

騒ぎをした末愈此の木を挽き割つて見ると驚いた、——今迄は水に蝕されて薄汚い材木とのみ見えたものが割つて見ると、中は幾十年の間水に浸されて、木汁の全く抜けた亞米利加のレッド、ウッド、左ながら籠甲の様な色に光つてゐた。

神田家の人々は驚喜した。夫れから急に串本の濱に長さ二間に餘る大風呂を沸いて、挽割つた材木を一々之で煮て、鹽出しを行つた。何分永い間潮に浸つてゐたことゝて、切口から潮が吹いて、持て餘したといふ。鹽出しがすむと、木は堅し、色は美し、寧ろ記念の爲に、此の木許りで家を建てたらば、何だらうかといふ議論が起つて、遂に之に決して、此の稻村亭が出来た。——と清右衛門君は語り終つたのである。見ると、成程八疊十疊

の二室は柱梁の類より襖障子は言ふも更なり、此の室で使ふ衝立、屏風、煙草盆に至る迄、盡く此の木一本で作られてゐる。世にも珍らしいものだ。

此の木が何の樹だか、何處から来たか、何百年経つたものか、丸で分らぬ。初は色に依つて、紫枋樹と鑑定したものもある。印度から流れて来たものと言つた者もある。レッド、ウッドと見たのは、矢張り神田家の一門で、今東京エニテリアン協會にゐる神田佐一郎君の鑑定である。成程、レッド、ウッドとすれば、カリフォルニアの森林から、太平洋をふらりふらりと流れ渡つて来たものとの見當はつき易い。

もう捕鯨船の歸る頃だと、僕は老人に連れられて、濱へ出た。

十一 潮岬の上野

晩春の風あたり肌に快よき一日、見渡す限り豊かに穂の出た麥圃の間を通つて、串本から潮岬の方へ出かけると、途上野に入つてから彼方此方に立派な新築が既に建つてゐるものもある。建ちかゝつてゐるものもある。案内に立つた漁業組合長の瀬戸洋君が一々之を指して、彼は何處やらへ眞珠取に出てゐた出稼人の家、此は何處とかの富籤に當つて歸つた者の宅と、夫々に説明して呉れる。總じて民の裕福な熊野路のことゝて、家の立派な位は格別氣にも止らなかつたが、さて其の説明を聞くに及んでは聊か疑問も起つて來る。「おい瀬戸」。瀬戸君

は二十年前の同窓、遠慮のいらぬ中である。「何ぢや」「海外出稼人なんて、多くは無教育な奴許りだらう。」「まアそんなもんぢや。」「そんな無教育な奴が、唯金を持つてるといふ丈で村中で、のさばり返るのは、村の風儀の上に非常な悪影響を來しはしまいか。」「所がさうでないから不思議ぢや。』

世間に能くあることだが、田舎の百姓や漁師が海外へ出稼して、不相當な金を儲けて歸ると、根が理想の低い輩のとして、金のあるに任せて、下らぬことに贅澤をする。村民が自然之を見て眞似る、眞似ることの出來ぬ者は無暗に羨ましがらる。之が爲に淳朴であつた村民の風俗が、次第に浮華に流るゝは定のものである。之がさうでないといふなら、誠に瀬戸君の言ふ通

り、不思議ぢや。

此の不思議を、瀬戸君は説明して呉れた。曰く海外出稼人の歸朝した者は、孰もぐツすり、と金を持つてゐる。金は持つてゐるが、さて哀しいかな、教育もなければ地位もない。之が見ず識らずの他國へでも行つたのなら知らぬこと、素性も何も知れ渡つた、生れ故郷へ歸つたのでは、いくら金があつても、金許りで大ビラ切る譯には行かぬ。夫を彼等は無上に恥かしがつて、自分等は今更仕方もないが、せめて自分の子供だけには、人なみの教育を受けさせたいと思ひつくのである。之が爲に村中で此等出稼人ほど其の子弟の教育に力を入れる者はなく、又村の教育事業に彼等ほど惜氣もなく金を出す者はない。現に

此の上野は四百戸の小村に過ぎぬが、此の村の小學校建築費一萬七千五百圓といふ大金は全部海外出稼人の寄附にかゝり、今學校には見積價格二萬圓餘りの基本財産がある。明治三十七八年頃の統計では、外國出稼人の此の村へ輸入した金額約二十七萬圓に達したといふが、今日では幾倍になつてゐるか知れぬ。此等の出稼人の中では、歸朝の後、其の所得額の一分を村の教育費に寄附するといふ習慣法が、何時の間にかやら出来てゐて、殆ど競争の姿で金を出す。村の太郎兵衛が千圓出したなら、乃公は二千圓出さう。権兵衛が二萬圓儲けて來たといふなら、自分は表面二萬五千圓儲けた積で、其の一分を出さうといふ勢ひ。中には、教育費の寄附に友達に負けてはとの意地

から、態々歸朝の期を一年二年延ばす者さへある。此に於てか、村は小さいが、教育費の豊富なことは何處にも負けぬ。——斯いふ心掛の宜い出稼人だけあつて、彼等は謙譲自ら持して、金持ぶつた様はせず、概して品行も善く、村民とも折合よく交はる。別に自分等は出稼人の俱樂部を申本に設けて、此の邊から米國や濠洲へ出稼に行つた者が、始終相會して、昔を語り合ふのを無上の樂みとしてゐる。

村に入れば、寂として人のけはひもせぬ。偶道行く人を追かけて、瀬戸君が、何うして今日は斯う寂しいと問へば、其の人急に頬被を取つて、丁寧に挨拶した後、『今日はふのりの口開けでノシ』と云ふ。此の邊では舊曆三月三日迄一切ふのりの採

取を禁じてある。此の禁を犯した者は何年間とか漁業禁止を食ふので、磯に落散るふのりの葉ツ葉一枚さへ採る者がない。其の代り口明けとなると、村民は貧富老若擧げて家を空にして、辨當持で出かけるのださうだ。村の規約を守るなど、いふ考へは、存外發達してゐると、瀬戸君が言ふ。

之ある哉と、僕は思つた。

十二 潮岬と世界

兎角して、潮の岬の端へ出た。なだらかな高低のついた一面の芝生が見る目遙に打續いて、其の間に薺、蒲公英が咲いてゐる。羞かしげに脊を屈めたやうな磯馴松がぼつりくと處々

に立つて、之に繫がれた牛の姿が如何にも春めかしい。村の乙女子が、此の芝生で鬼事でもするものか、陽氣な笑ひ聲が遠くで聞える。右の方には燈臺の白い壁が、巍然として中空に聳え、左には無線電信局と海軍の望樓とが宛ながら、岨から落ちかかるやうな處に立つてゐる。岨の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて、山骨露はな巖が、幾重となく列んで、之に太平洋の大波が氣兼ねもなく、思の儘に寄せては返し、寄せては返す。

僕等は今しも日本の本土の最南端の一角に立つたのだ。打開けた太平洋の海面雲煙淼渺として、其の果何處としも覺えぬ。地圖を按ずるに、此處から正南は丁度蘭領印度のニューギニアを隔て、濠太利亞の大陸に相對し、東は一直線に進めば、

遙に太平洋の千波萬波を越えて、北亞米利加はカリフォルニア州のローサンゼルス迄、間を遮るものもない。日本の南端の一角といふと、如何にも世の中から棄てられた處のやうに聞えるが、其の實、此の一角が、即ち日本と世界との接觸する所だから面白い。

先づ此の岨角に立つた白色不動の燈臺は、世界の船舶に其の針路を示してゐる。此處の無線電信局は、日々夜々に世界と相語つてゐる。若し夫れ、海軍の望樓に至つては、夜となく日となく、苟くも此の下に船の影さへ見えたら、其の内何れの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋ね、さては其の用を聞きて、傳ふべき處に傳へる。斯う世界的に出來た處

に育つた潮岬村の人々として、其の中から濠洲や米國に出稼する者の多く出て来たのは、無理もない。荒海を見慣れた眼には、對岸を隣國とも心得てゐるかも知れぬ。潮岬の民は、小さいながらも、世界的の民だと思つて、ふと自分の事に氣がつくと、今日四月の二十二日、去年は朝日世界一周會で愈紐育の見物終つて、明日大西洋に乗り出さうといふ日だ。一昨年とは言ふと、丁度今頃は巴里から倫敦へ向ふ途中、海峡を過ぎて、ケント州の櫻桃杏梨今を盛りと咲き亂れた中を走つてゐた頃である。愈此奴は世界的になつて来た。折しも望樓で頻に信號旗が揚る。夫と許り、瀬戸君を促して、急ぎ見に行けば、望樓長は芝生に立てた望遠鏡の下に坐つて、

信號旗を上げよ下げよと、忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ぱち／＼と氣たゝま七い音を立て、電信をかけてゐる。今迄静まり返つてゐた此の日本の最南端の一角は、俄に色めき立つて見えた。沖には通報艦の淀が行く。

十三 湯崎の村賓

新橋から大森の宅へ歸る汽車の中で、中松盛雄君と一緒になつた。農商務省特許局長高等官何等とかいふ所は、姑く措いて田邊生れの紀州者といふ所で、問答が始まる。「おい熊野へ行つたさうだな。『ウン。』『湯崎へも寄つたかい。』『ウン。』『湯崎

も大分變つたツてネ。『ウン』『米を持つて行つたかい、米を』
 — 此奴は一寸『ウン』と言ふ譯に行かぬ。全體突然に米を持
 つて行つたかとは、何の事やら僕に分らない。其處で尙能く聞
 いて見ると、中松君の幼い頃は、湯崎の温泉に宿屋らしい宿屋
 がなくて、一々米や薪を持つて行つたものだといふ。成程其の
 頃から見れば、湯崎は大分變つてゐる。

十七年前に僕の行つた時、或夜餘り眠れないので、一時過ぎ
 に崎の湯に入りに行つたことがある。歸つて宿の者に話すと、
 孰れも喫驚仰天して能く無事に歸つて來たと祝して呉れた。
 何故だと聞けば、十二時過には崎の湯へ天狗が出る。遠くでび
 いびい／＼と鳴いてゐるかと思ふ間に、颯と羽音荒く落ちて

來て、其の儘人を引摺んで行くとのことであつた。お蔭で僕は
 天狗の啼聲のびい／＼たることを初めて覺えたが、其の
 崎の湯にさへ、近頃は男女混浴禁止とあつて、時間を定めて、男
 女交る／＼入ることになつてゐる。崎の湯なら屋根さへ取れ
 ば、海水浴も同前、あんな處に混浴も何もあるものかとは思ふ
 が、之が即ち文明のハイカラ流だと言ふので、文明とか、ハイカ
 ラとかいふことを一切心得ぬ僕は、成程と感心して了つた。
 去年來て見ると、田邊と湯崎の間に定期の小蒸氣が通つて
 ゐる。尤も此の定期船は定期通りに出は出たが、晝過歸らうと
 すると、田邊から來てゐない。聞けば、波が荒いので、來るか來ぬ
 か知れぬといふ。其處で、せん方なしに綱不知迄歩いて、此處か

ら白旗で田邊迄合圖をして、やツと迎に來て貰つた。夫でも兎に角定期船は定期船と感心した。今年田邊へ行つて聞けば、ま何でせう、湯崎には玉突場が出来てるとの話。感心のし易い僕は又もや感心した。所が熊野巡禮を終つて、田邊迄引上げて來ると、湯崎では、村の決議で僕を村賓として請待したいと言つて來た。僕は又參つた。

村賓とはえらい名をつけたものだ。僕は其の名に愛で、喜んで之に應じた。一體物は名が大事だ。田邊の近所には、えらくやかましい名前が多い。鬼橋巖といふがある、三壺崎がある、文里灣がある、秋津の奇絶峽、鉛山の平草原、圓月島、龍口巖、芝雲石、三段壁などむづかしいの何のといふ段でない。名前のむづ

かしさに、折角の名所が、如何にも行き悪さうに聞えて、肩が凝る。扇ヶ濱といへば、如何さま夏向海水浴にも宜さうなが、三壺崎と有つては、むうと熱苦しくなる。千疊敷で通るものを、芝雲石とはあんまりな眼鏡巖で事足るものを、故さらに物々しく圓月島とは不粹も亦極まる。夫れから見ると、海穩かにして船網を用ひずとして、『網不知』とつけた灣の名はゆかしい。網不知の少し彼方に、濱中硯石の碎けた眞白な一面の砂原がある。白いからとて、之を白良濱と名けたのは當つてゐる。此の砂を田邊あたりの藝妓共は、小糠の代りに使つて、之で顔を磨くさうな能く、面の皮の厚い奴原と、相見える——いや話頭は妙な所へ外れて來た。

村の決議で村賓を招く程に、湯崎が變つて來たことを、恐らく中松君は知るまい。

十四 三年前の反吐

上

西牟婁の田邊の町の片ほとりに、小やかな家を賃して、十年程前から來り住んでゐる人がある。年の頃は四十前後で、其の便々と突き出でた大きな腹、ぎよろりと人を射るやうな眼ざし、赫と怒らせた兩肩、始終もぐくと膨らませた兩の頬、丸で上野に在る老西郷の銅像を、生の儘で見るとやうな家は、玄關と茶の間と書齋に充てた八疊の座敷と、都合三室きりだが、此の書齋の中には、山と積んだ和漢洋の書籍と、主人が丹精に成つ

た植物の標本とが、ぎツちり一杯に詰つて、足の踏入れ所もない。入るとぶんと變な臭氣がするのを、何ぞと問へば、三年前に酔つ拂つて吐いた反吐を、其の儘掃除もせず、捨て置いてあるのだと云ふ。

此のぶんと來る引散かした書齋の中央に、主人は年中殆ど赤裸々の姿で、どツかりと坐り込んで、日がな一日こつ／＼と何やらんやつてゐる。偶人が尋ねて行つても、氣に向かぬ時は、相手にもしない。強て話でもしかけたら、夫れこそ大變雷の落ちたやうに怒鳴りつけられて仕舞ふ。夫れが又何うかして氣が向いたとなると、喜んで人を迎へて、滔々幾千萬言、古今に涉り、東西に通じて、哲理を談じ、歴史を語り、科學を講じて、倦む所

を知らぬ。此の前田邊中學の生物學の教師とかい、憚々と教へを乞ひに出かけた所が、主人は例の赤裸裸の儘で、歌麿か何かの春畫を前に置いて、之を材料に、凡そ小半日、生理學の講釋をして聞かせたさうな。——如何さま噂を聞いた許りでも、只者でないことは知れる。

實にも彼は只者でない。彼は前回に出た中松盛雄君など、和歌山中學で同級であつたが、其の頃から反吐を吐く名人であつた。彼は反芻族の動物の様に、胃袋を二つ持つてゐるのだと自稱してゐたが、夫かあらぬか、胃の中に在るものは、何時でも口へ出せるといふ一種特別の技倆をもつてゐた。汚い話だが、彼れは教場の中で、其の朝食つた朝飯を出して見せたり、運

動場で人と喧嘩して、相手の顔へぶうと反吐を吐き掛けたことが屢ある。何でも食つた物の消化したかせぬかは、自分で分ると言つてゐた。彼れは其の身體の構造から、既に尋常一様でなかつたのである。

彼れは和歌山中學を卒業して後、上京して大學豫備門に入り、間もなく米國遊學の途に上つた。米國では、初めミシガン大學に遊び、次でアナボア大學に轉じたが、留まること三四年にして、飄然として玖巴に出かけた。彼は趣味の極めて廣い人で、文學、史學、語學、哲學から、動物、植物、天文、地理の學、何一つ一渡り心得ぬはなかつたが、其の主として専攻したのは、植物學の科蘇苔科の研究で、其の玖巴に行つたのも、亦之が實地研究の

爲であつたといふ。

斯くて彼は玖巴から倫敦に出た。丁度此の頃彼が郷里の實家に一大不幸があつて、彼が學資も前日の通り豊かに仕送らるゝ譯には行かなくなつたので、倫敦では一時卷煙草の職工みたやうな賃仕事をして、苦學を續けたさうな幸ひにして彼は其の間も研究を怠らす、時々其の研究の結果を同地の雜誌などで、公にしたので、彼は次第に人に知られ、世に用ひられて、遂に何時の間にやら、倫敦なる英國博物館の東洋部の委員を囑託せらるゝに至つた。其の頃倫敦にゐた日本人なら、恐らく誰一人其の名を知らぬはあるまい。又其の名を知つた者なら、恐らく誰一人彼が學殖の深邃、容易に近づくべからざる者で

あることを言はぬはあるまい。——前年有栖川宮殿下御滯英中の折、特命に依つて、彼が博物館の御案内を申し上げたのも、此の時分のことである。

外遊十有六年の後、彼は飄然として故國に歸り來つた。歸つて何したかと言ふと、彼は飄然として熊野の奥に隠れたや、暫く此處に隠れ果せた後、又飄然と此の田邊に出て來て、今は其の細君と一子を相手に讀書三昧に入つてゐる。時々は標本を作つて、海外の同好に贈り、又は筆を取つて其の研究の結果を海外の諸雜誌に公にするばかりで、此處に斯な世界的の大學者の居ることは、恐らく餘り知つた人があるまい。

此の隠れたる學者といふは誰ぞ。曰く姓は南方名は熊楠、和

歌山市の大酒造家南方常楠君の實兄。

下

南方君の大學者たることは誰も認めてゐるが、夫れがどれ程博いか、どれ程深いかに至つては、餘り誰も知らない。其の專攻した蘇苔科植物の事は無論手に入つたものだらうが、其の外日本支那の歴史にも明い。佛教の事も心得てゐる。解剖生理の學に於ける造詣に至つては、正しく尋常でない。殊に比較解剖學に於ては、下手な醫學博士なんどの及ぶ所でないといふ。さうかと思ふと、彼は奈良平安朝の國文から、鎌倉徳川時代の卑俗な文學に迄精通して、現に八犬傳の妙所の如きは、すらすらと宙で讀む。彼とデツキンスとの合譯に成つた鴨長明の方

丈記の中に、デ氏が「我友南方氏は余が今日迄に出會へる日本人中の最も篤學なる人 (the most erudite Japanese I have met with) にして、彼は東西の科學文藝に齊しく精通せり。」と書いてある位。だから、若し彼をして尋常に世に出でしめば、彼は少くとも醫學理學文學の三博士を兼ね得べき者だと迄、彼を知つた者は皆言つてゐる。

若し夫れ、彼が語學に堪能なる點に至つては、正に天稟の才、人力の企て及ぶべき所でない。彼は幼時より和漢の文學を涉獵し、殊に其の日本語の達者なことで、屢人を驚かせたが、其の後一たび歐米各地を巡遊するに及んで、記憶力の強い、而して趣味の博い彼れは、何時しか英、獨、佛、伊、西、羅の六箇國語に精通

するに至つた。殊に其の羅典語に至つては、日本一品とさへ評さるゝ程である。嘗て紀州の某君が倫敦滞在中、某の席で南方君と會飲して、雙方ともへいれけに酔ッ拂つたことがある。南方君の大酒は有名なもので、途中怪我でもあらせては大變と、件の某君は一廉介抱でもする氣で、自分の酔つたのも忘れて、之を其の宿迄送り届けた。届けたのは宜かつたが、さて餘りの苦しさに、自分は其の儘打倒れて寝てゐると、さしも泥の如く酔つてゐた南方君は、まだ寝もやらず、何やら机に向つてやつてゐる。翌朝になつて聞けば、約束があつたとかで、彼時から羅典文の何やらを翻譯し始めて、朝迄に六十頁譯したのであつたといふ。

倫敦の日本人間で、南方といへば今でも誰知らぬ者はない。彼に關する逸事は、到る所に傳へられてゐる。前年前田正名氏が歐米漫遊の途次倫敦に寄つた時、南方君に案内を頼んだ。何分滞在の日數が短いから、成るべく手早く、何か殖産興業の參考になるものを見せて呉れといふと、先生委細快く承知した。夫で何したかといふと、其の翌日から九二日間、英國博物館の祕密室に陳列した各國の春畫を見せて回つて、殖産興業の基礎一に此に在りと、流石の前田正名氏を煙に巻いて了つたといふ話がある。斯んな話をすれば、僕を更へても盡きぬ。

彼が玖巴にゐる間に、折節起つた玖巴の革命軍に身を投じて、西班牙兵と戦つた揚句、一時西班牙の捕虜になつたといふ

説もある。又孫逸仙と相結んで、南清の革命黨に加はつたとか、加はらうとしたとかいふ説もある。夫が爲か何だか知らぬが、孫逸仙が態々和歌山へ下つて、南方君と臂を把つて相語つたことのあるは、事實である。兎に角、學者は學者ながら、毛色の變つた學者のことゝて、氣が向くと、斯なバイロン風のことゝやつて見るらしい。

田邊に引籠つてからも、様々の逸事はあるが、中には、彼れが新發見で郷黨を驚かせたこともある。彼れが田邊に近い富田村に石を刳つた千體觀音を發見したのも其の一だが、或時は熊野の奥に何とかいふ苔があつて、之は佛國で羅紗の染料に使ふ高價のものだが、誰か金を出す奴があるなら、教へてやら

うと説いて回つたこともある。生憎と誰も金を出す者はなかつたとかで、今に其の儘になつてゐる。又彼が此の地に發見した粘菌の新種二三は世界に類のないものだとして、其の圖譜が大英博物館の官版となつてゐる。人が彼を隠れたる學者などといふと、大に怒つて、乃公は日本でこそ隠れてゐるが、名は世界中に知れ渡つたものだと來る。

斯な學者を斯う遊ばせて置くのは惜いとして、倫敦以來彼に様々の就職を勧めた者が、幾人あるか知れぬ。正金の故中井芳楠君も其の一人である。眞言宗の土宜法龍師も其の一人である。農科大學の川瀬博士も舊友といふので、夫となく當つて見たことがある。慶慶義塾の鎌田榮吉君も、故田口卯吉君も、舊藩